
LOSING MY MIND

世にも奇妙なお話

QUOD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOSING MY MIND 世にも奇妙なお話

【Nコード】

N7310I

【作者名】

QUOD

【あらすじ】

高橋直人は上司の勧めで、保険に入ることにした。

そしてある保険会社の記事に目がいく。そのチラシによると保険に入った者にはもれなく”車”が貰えるとのこと。

高橋は即座に決意し、この保険会社に加入したのだがなんと届いたのは車は車でも・・・

保険の内容もインチキで、高橋はこの保険をやめる。この、お盆休み・・・。この十日間で、自分の感情が壊れることを、高橋はまだ知らない

1・保険（前書き）

さて、初めましてな人は初めまして。

作者ことQUODです

今回の小説は世にも奇妙な物語に雰囲気似せて書いております。
とことん怖くすることも可能でしたが、あくまで奇妙を目指したか
つたので、怖さは控えめかな……。読み返したら結構怖くてびっ
くりしたけど（笑）

1・保険

僕の名前は？橋直人、26歳。ごく普通のサラリーマン。スーツを着こなし、真面目に働いているが、上からの小言が絶えない。ほとんど、自分たちの責任だろうに。そのしわ寄せがこちらに来るんだから、たまったものでは無い。僕はひそかに、自分が上にきたら下の奴らをいじめてやろうかとも思っていた。

そして、今日も書類の整理。凝った肩をもみほぐしながら、小言を言われないように慎重に、かつ早く進めていく。すると、少ししわがれた声が僕を呼んだ。

「おい、？橋。」

やれやれ、また小言かよ……。僕は気が重いながらも、行かない訳にはいかず、ゆっくりと腰かけ椅子から立ち上がる。

「何でしょう？課長。」

課長のいるデスクに、近づきながら尋ねる。僕は恐る恐る、パソコンを見つめている課長の顔を覗いた。しかし、課長の顔はいつもの“怒っている顔”では無かった。

（あれ、失敗じゃないのかな？）

「？橋。」

「は、はい。」

疑問の中から急に引きずり出され、思わず声がつわずる。すると、課長は、一旦パソコンから目を離し、僕の方を向く。少し眉間にし

わを寄せた顔で、苦笑いしながら

「何だよ、別に怒るってわけじゃないんだぞ。それとも何か？俺は、いつもお小言を部下に言っつて、自分の憂さを晴らす、最低上司のように見えるっつてか？」

「いえ、そんな事はありません！」

（その通りだよ！てめえな、毎日のように憂さを晴らしているくせに！）

と、思っている事を、素直に言葉にできる訳もなく、仕方なく否定してあげた。

「ふん、まあ良いか。」

しわがれた声の男は、僕から目を離し、パソコンに向き直り、手を動かしていく。

「あ、あの、」

先輩の顔色を窺いながら、僕は尋ねた。

「あの、僕に何の用でしょうか？」

「あ、そうそう。お前、まだ生命保険に加入していないだろ？」

「え、ええ。自分にはまだ、必要無いと思ひまして・・・。」

「あのなー、今のご時世、お前みたいなきい男性でも急にバタツ、てのも有り得るんだぞ。」

そう、この会社は有給休暇が多い代わりに、労災保険に加入しないのだ・・・。だから、保険は自分で入らないといけな・・・。

(ていうか、若者達がバタツ、となるのも人使いの荒い上司のせいじゃないのか?)

「確かに君は独身で、一人暮らしだ。だから、死亡保険に入っても意味はないかもしれないが……。手術とか……。入院とかになつたら大変だろ?働けないのに、お金を払わなきゃいけないって……。」

少し薄めの髪を掻きながら、課長は言った。というより、正直驚いた。最低のダメ上司だと思っていたのに……。ちゃんと、部下の体の事も心配してくれているのか……。

「は、はい。分かりました。何かに入ろうと思います。」

「ああ、そうか……。」

見た目よりも少し年老いた男は、パソコンに向かったまま、そう言った。少し……。この人に対する認識を改めよう……。そう思って踵を返す。

しかし、後ろから追うように聞こえた課長の声が、この決意をグラグラと音を立てて揺らした。

「良い保険を見つけたら、俺にも紹介しろよ!」 決めた……。

僕が上司になった暁には、部下を徹底的にしごいてやる!

1・保険（後書き）

この小説ももう既に書き終えています。
なので暇があり次第投稿したいと思います

2・笹原保険（前書き）

全く怖くありません、まだ

2・笹原保険

ふう。足が重い。街灯に照らされた夜道を歩く。もう春だというのに、風は一向に冷たく、それがまた夜の不気味さを盛り上げる。正直、ホラー映画の類は苦手だ……。あんなもの見て、なんになるというのだ？お化け屋敷に入って、それが楽しいとでも言うのか？くだらない事を考えながら、重い足を前に進める。

今日も疲れた。あの後、課長に長々と小言を言われたり、外周りに行ったりして体力がほとんど残っていなかった。課長の小言を聞き流しながら、僕は生命保険になんて入ってやるものかと、ひそかに心に決めたが……。カーブミラーに映った自分の顔を見る。

(ハハハ、入社の時とはえらい違いだ……。)

鏡の向こうにいる男は、入社した時の満ち溢れた希望というのが感じられなく、少し痩せた窪んだ顔で、こちらを見ている。

「この調子じゃ、本当に何時倒れてもおかしくないかな……。」

鏡の向こうにいる男に、言葉を投げかける。勿論、答えが返ってくるはずも無い。僕は一度大きく溜息を吐き、道を左に曲がった。しばらくして、闇に黒く染められたマンションにつく。マンションとは名ばかりの、オンボロ小屋ではあるが、家賃は安い。入社したての時、貯金がほとんど無く、実家の親もお金を貸してくれなかったので、ここに決めたのである。最初は、少しお金が貯まったら、引越そうと思っていた。しかし、住んでみると、なかなか居心地が良かった。2階建てマンションの階段を上り、奥から3番目の“205号室”の鍵を開け、中に入る。

「ただいま・・・。」

一人暮らしなので、帰ってくる言葉は一切なかった。こういう時にやはり、やりきれない寂しさがこみあげてくる。僕は、その気持ちを振り払うと、六畳一間の和室に鞆を乱暴に投げいれ、靴を脱いでドカドカと入り込み、中央のミニテーブルの横に腰を落ち着かせる。

「あー、やっぱり、ここが一番落ち着くな・・・。」

そこまで広くはないけれど、畳の匂いが僕の心を癒してくれる。

(ここは僕の城だ！城なのだ！僕は断じて引っ越さないぞ！)

ここには小言を言う課長もいない。のんびりと、くつろげる唯一の場所でもあった。引っ越さないという決意をあらわにした後、両手両足を広げて、畳に倒れる。畳の感触、これがまた実にいい。恐らく僕の顔は、会社の誰も見た事が無いくらい綻んでいるだろう。暫く、横になっていると、僕しかいない筈の部屋に不気味な音が鳴り響いた。

グーッ。

「あらら、腹の虫さんが入り込んだようだな。不法侵入だぞ。今すぐ、僕の城から追い出してやる。」

馬鹿な独り言をつぶやき、体を起こす。そして、部屋の隅っこにあるミニ冷蔵庫を漁る。

(ちえー、何もねーでやんの。)

仕方なく、今度は、古ぼけた茶色の棚の下についている引き戸を開ける。

「おっと、ここに我が愛しのカップラーメンがあるではありませんか。しかも醤油味ときた。」

一人暮らしをすると、独り言が増えるらしいが僕は典型的なパターンのようだ。僕はそれを引っぱりだすと、小さなヤカンに少し鉄くさい匂いにする簡易台所(と言ったら、大家さんに失礼かもしれない。)の、蛇口から水を注ぎ入れる。そして、チャッカマンを使って、入りたての頃から黒くなっていたガスコンロ。これがめんどくさく、スイッチを押し、ガスを出してチャッカマンで火をつけなければならぬ。コンロと別モノじゃないか！コンロなら、押しただけでできてもいいだろ！この機械の名前を、僕が名づけてやろう。

「今からお前は“いちいち火をつけるのメンドインジャー”だ。」

そして、僕は“いちいち火をつけるのメンドインジャー”にいちいち火をつけ、その上にやかんを置く。

「これで良し！」

お湯が沸くまで退屈なので、畳に仰向けに寝転がる。すると、疲れのせいか少しずつ、体に浮遊感が増えてきて……。あー、目がまどろむ……。

ピーッ！

「うわ、何だ！敵襲か！」

どうやら転寝していたらしい。僕は急いで“いちいち火をつけるのメンドインジャー”のスイッチを切る。

（危ない、危ない。もう少しで火事だよ。）

我が愛しの食べ物の蓋をあけ、中にお湯を注ぎ入れる。携帯電話で時間を確認する。11時24分。これで、3分経てば不法侵入者を追い出せる。

「しかし、最近カップラーメンばっかだな……。全く、このコック長は何をしているんだ！」

「すいません。材料を買いに行く時間が無くて……。後、料理をする時間も……。」

「そりゃー、毎日小言を言われてサービス残業してたらなー。」

傍目から見たら、とても痛い人に見えるだろう。しかし、一人暮らしというのは、そう言うものなのであると分かってももらいたい。そう言えば、最近まともに湯船に入っていないな……。

（いつもシャワーだけしか浴びてない……。）

ここにはお風呂が無く、シャワーだけしかない。しかも、ただのシャワーでは無く、シャワーヘッドがついていないのである。ただのホースだ。それに、体もやっぱり重い。偏った食生活してたら……。自分の将来を想像してゾツとした……。まさに悪夢だ……。やっぱり、保険に入った方がいいのかな？僕は“料理”が出来る

間に玄関の扉に向かう。扉には郵便受けになるよう、細長い穴が
いている。他には、銀色のつまみとノブ、覗き穴があるだけの何の
変哲も無い木造のドア。その下には、郵便受けから入ったであろう、
いくつかの紙があった。

(もしかしたら、保険の案内も入ってるかも……)

僕は、それらの紙を持ち上げ、ミニテーブルで整え、一枚一枚確
認していく。

(バーゲンのお知らせ、ゲーム店の広告、またバーゲンのお知ら
せ。)

すると、たくさんの赤やら青やらのチラシに混ざって、“笹原保
険にご加入しませんか？”という広告があった。僕は、その文章
をゆっくり読んでいく……。

(えー、なになに、月々4000円でいろんな保証が受けられる
？死亡保障、葬式保障。こちらへんは身寄りがいないからいいか。
入院保障は一日につき一万円……んん？)

その広告の中に一際、目に飛び込んでくるものがあった。

(ご加入した人にはもれなく車が貰える……、だと！)

僕は、憧れのマイカーを想像する。こりゃ、頂きだ。僕はすぐさ
ま携帯電話を開いて……、

「あつ！そうだ！大事な事を忘れていた！」

もう不法侵入者を追い出す時間ではないか！僕は急いで、箸で蓋をした愛しの食べ物を腹に流し込む。

「チツ、一分ほど長生きしたようだが、所詮ここは僕の城！僕以外はいてはいけないのさ！」

不法侵入者を追い出した後は、ゆっくりとカップ麺をすすり、先程の広告を読む。

（待てよ、僕。車が貰えるなんてそんなうまい話が本当にあるのか？でも、マイカーはやっぱり欲しい……。）

四苦八苦した挙句、カップ麺が汁だけになった頃に決断がつく。

（よし、騙されたと思って入ろう。本当に騙されたのだとしても、きちんと保険はあるし……。）

僕は青塗の携帯電話に、広告に載っている電話番号をプッシュしていく。何回かコールがあった後、返事がくる。

「はい、こちら笹原保険会社の者ですが……。」

がっかりした……。広告には綺麗な女の人 が写っているのに、返ってきた言葉が少し低い声をした男性のものだったからだ。

「あ、はい。あの、資料を請求したいのですが……。」

その後、何回か言葉を交わす。低い声ではあるものの、とても話しやすい人だった。

「では、明日には届くと思いますので……」

「あの……」

「はい、何でしょう？」

僕は、一番疑問に思っている事を聞く。

「この広告に“車”が貰えると書いてあるんですが……」

「はい、ご加入頂いたお客様には、その一週間後に届く予定になっております。」

「あ、そうですか！どうも。」

そう言って、電話を切る。僕は、カップ麺の入れ物をゴミ箱に捨て、紅い箸を洗う。そして“ホース”で体を洗いながら、マイカーのあれやこれやを想像した。

2・笹原保険(後書き)

とつうか三分の二ぐらい終わらないと怖くならない・・・orz

3・送られてきたもの(前書き)

この主人公・・・、馬鹿です

3・送られてきたもの

「ふん、ふん、ふーん。」

「どうした？やけに上機嫌だな。」

仕事中に鼻歌を歌っていると、しわがれた声が僕を呼んだ。しよ
うがないのだ。来週に来る予定の車の事を考えると、否が応でも気
分が高まってしまう。一体どんな車なのか、外国車は無理だとして、
どんな色なのかな？無理してでも、カーナビをつけようかな？そん
な妄想から、しわがれた声によって引きずり降ろされる……。

「いや、何でもありませんよ。いい保険が見つかっただけで……

」

言って後悔した。しまった！課長の目がキラキラと光る。まずい！

「あ、私、ちょっとコーヒーを買いに……」

「まあ、待ってって。」

肩をがっしり掴まれ、無理矢理体の向きを変えられる。い、いて
え！こいつゴリラ並みの握力してやがる！僕は年老いたゴリラの方
に体を向けられる。

「どういう保険なんだ？何処の？どういう保証が？」

まずい……。こりゃ、雷でも降らない限り離れそうにない……
。アーツ、肩がイカれる！

「課長、お電話です！」

ナイスタイミングで“雷”が降った。女性の同僚が、課長を呼んだのである。

「おう、今行く。」

しわがれた声のゴリラは、渋々僕と言う名の“木”から体を離す。助かった・・・！やっぱりこういう、いい話は独り占めにしないとね。死んでも、あのゴーツク課長に教えるもんか！僕は、再び妄想を膨らませ、デスクに腰を掛ける。数分の後、課長がしょぼくれた顔で帰ってきた。どうやら、奥さんからの電話だったらしい。ナイスタイミングでかけて来てくれたのはいいが、その鬱憤は僕に小言を言っただけだから、たまったものでは無かった。どうやら、保険の事は忘れられしく、僕に小言を言った後、デスクワークに戻った。

そして一週間が経ち、待ちに待った日が来た。日曜で休暇だったのだが、じっとしていられなく、意味も無く髪をとき、会社の制服を着て、ネクタイをビシツと決める。

「まだかな、まだかな！」

一秒が何分にも感じられ、部屋の中を、腕を組んで歩きまわる。時刻は既に午後一時。もうそろそろ、来てもいい頃だけど・・・。僕は一日千秋の思いで、その時を待つ。

ピンポーン

軽快な音が鳴る。それと同時に、僕はダレかけていたネクタイを再度ビシッと直し、駆け足で玄関に向かった。木製のドアの前までくると、一度大きく息を吸って吐く。そして、ドアをゆっくりと開ける。

「はい、何ですか？」

まだ完全にドアを開いていなく、相手が見えない時にそう言った。こういう風に言ったのは、もしも、違っていたらとんだ赤っ恥になっってしまうからだ。しかし、それでも声は無意識のうちに浮足立ってしまったている。

「宅配便です。判子をお願いします。」

「あ、はい……。分かりました……。」

いきなりがっかりした僕を見て、青い帽子をかぶった宅配便の人は、不思議そうに眼をぱちくりさせる。宅配便か……。なんだ、車じゃないのか……。先走って“車ですか？”なんて聞いてたら、赤っ恥も良いところ。肩をがっくり落として、玄関の横の棚の引き出しから判子と朱肉を出す。そして、判子を押し、段ボール箱を貰う。宅配業者の人は一礼すると、そのまま帰って行った。

それにしても、誰からだろう？注文した覚えや、葉書を出した覚えも無い。実家の母からか？不審に思っ、差出人の名前を見る。……。目を擦って、もう一度見る。

笹原保険会社

何で？届くのは車の筈じゃ……。この時、私の頭はハツカネズミみた、急速に回転した。そして、一つの答えを導き出す。

「車の備品か何かか！」

そうだ、そうに違いない！なんて気の利いた事をしてくれるんだ！僕はランラン気分で机に向かい、送られてきた段ボール箱を置く。そして、貼られているガムテープを・・・、最近のはがしにくいったらありやしない！爪をビンとたて、何とかはがす。その後、勢いよく蓋をあけ、衝撃吸収材、いわゆるプチプチを全て取り除いていく。さて、何が入っているのかな？僕は、手に当たった固形物体を勢いよくつまみあげた。

ミニカー・・・

間違いない。赤塗のミニカー。この時、僕の頭はハムスターみた、急速に回転した。そして、一つの結論を導き出す・・・。とてつもなく馬鹿げた答えを・・・。

「車って・・・、これじゃ、無いよな・・・？」

この独り言を合図に、僕の体はロケットのように素早く行動を開始した。取っておいた笹原保険のチラシの、電話番号を携帯電話にプッシュする。間違いだよな・・・、そんな筈ないよな・・・！何回かコール音がした後、

「はい、こちら笹原保険会社の者ですが・・・。」

受話器の向こうの声が男だった事に、またがっかりする。じゃなくって！僕は、祈りながら質問する事を一つ一つ整理する。

「あの、一週間前に入った？橋というんですが……。」
「何かご質問でしょうか？」

まずは、車がなかなか来ない件についてだ……。いきなりミニカーの話題に入って、もし間違いだったら笑いものだ。

「あの、車がなかなか届かないんですが……。」
「ちよつと待っていてください。」

相手方は受話器の保留ボタンを押したようで、何か陽気な音楽が流れ出す。調べているのだろうか？お願いだから、そう言う結果はやめてくれよ！今時そんなギャグねーぞ！数分の後、音楽が途切れ、さわやかな男の声が聞こえてくる。

「ついさつき、お届けに行ったみたいですが……。」

ヒューツという音が部屋全体に鳴り響く。もう確信と云ってもいいのだろうが、溺れたものは藁にもすがるので。僕は一握りの可能性にかけ、恐る恐る聞く。

「あ……、あの……、その車ってまさか……、」

僕は万感の思いを込めて聞いた。第二次世界大戦で、勝ち目のない場所に行かされた者の気持ちのように……。

「ミニカー、じゃないですよね……？」
「あ、やはりもう届いてらしたんですね。」

その言葉によって、自分の中の何かが弾けた。頭の中の、夢のマ

イカーライフが音をたてて崩れさる。そして残ったのは、赤塗のミニカー……。堪忍袋の緒がプツンと切れる。

「ちよつと待つてください！そんな事、チラシには一言も書いてないじゃないですか！インチキじゃないですか！」

まるで雪崩が押し寄せるかのように、言葉を放つ。それを相手は、重厚装備の城の如く、冷静に対処する。

「きちんとチラシを見てください。ちゃんと書いてあります。」

そう言われて、僕は机の上のチラシを見る。やはり車が貰える、としか書いていない！

「そんなのどこにも書いてないじゃ」

「車の字の左下をよく見てください。」

左下……。？言われたとおり、その部分をじつとよく見てみる。
……！まさか……。僕は、棚の引き出しから古ぼけた青ぶちの虫眼鏡を取り出し、もう一度よく見る。……。間違いない……。米粒よりももつと小さい、それこそミジンコぐらいの大きさで、そこには書かれていた……。 “ミニ” と……。ミニだけにマイクロサイズ。

「こんな見える訳無いだろ！」

「と申されましても、きちんとチラシに書かれている以上、その手の苦情は承っておりません。それに、保険としてはきちんと機能します。」

「……。分かりました。」

そう言って電話が切れた。肩が降り、無意味な脱力感にさいなまれる……。そんなおいしい話がある訳無いか……。

（この保険に入った時も騙されたと思って入ったし……。保険として機能するなら、別にいいか。）

僕は、机の上のプチプチを手にとり、一つ一つ潰していくのであった。

3・送られてきたもの（後書き）

プチプチを潰したくなるのは本能だと思っただ

4・解約(前書き)

このタイトル、僕の好きな洋楽のワンフレーズから

ZEBRAHEADの「THE WALKING DEAD」とい

う曲のサビから改良しました。この人たちの曲いいですよ！

まあ、CRUSH40には叶わないがな！

4・解約

「何なんですか！何で値上がりするんですか！しかも一万円に！」

携帯電話に向かって、僕はそう怒鳴りつけた。そうというのも、笹原保険に入って一カ月。毎月四千元ずつの筈の保険料が、毎月一万円に値上がりしたからだ。

「そうと言われましても、こちらのほうも不景気でして・・・。」

電話の向こうの、とてつもなく低い声の男は語る。しかし、納得できる訳がないでは無いか！幾らなんでも、値上がりの幅がひどすぎる！そうして、さっきから交渉しているのだが、一向に相手も折れない。

「もういいです！こんな保険、解約します！」

「それはできません！チラシにも書いてあるでしょう！」

強い口調になった男の声に怯えながらも、僕は、机の上のチラシの束に手を伸ばす。そして、何枚かめくって見つかったチラシはすでにポロポロの状態だった。しかし、下の注意事項の部分ははつきり読み取れた。

（この保険に入ったら、5ヶ月間は解約できません、だと！）

また、脱力感にさいなまれる。何なんだ、この保険。まるで鼠捕り！僕は4ヶ月後、必ずこの鼠捕り保険を解約する事を心に誓うのであった。

そして、それから2ヶ月後。事件は起きた。課長の命令で外回りの最中、緑色のトラックに積まれていた鉄骨が落ちてきて、左足の骨が折れたのである。そして、そのまま病院に……。ようやく、保険が使える。僕は、手術の話になった時、その話を医者にしたのである。手術の費用は三十八万円。大金であるが、こんな時のための保険だ。ところが……、

「使えない？」

医者の言葉に一瞬、我が耳を疑う。薬臭い部屋のイスに座る、髭を豊富に蓄えた医者は、資料から目を離して僕に言った。

「よく見てください。この保険、手術に対しての保証が全くないんです。」

「え……。」

僕は医者から資料を乱暴に奪い取り、保証の所をよく見る。……、無い……。手術の保証が何一つ無い。医者は白衣を正しながら言う。

「今時こんな保険も珍しいというか、何と言うか……。」

医者も困ったような顔をしている。結局、手術の代金は自腹であった。手術は無事に成功し、二ヶ月の入院となった。流石に、入院の費用は鼠捕り保険が保証してくれた。しかし、こんなグダグダな保険はもう嫌だった。

そして二ヶ月後、無事に退院し医者にお礼を言う。医者は「お大事に。」とだけ言ってくれた。僕はギプスをつけたまま、会社の仕事を頑張った。熱い初夏の日差しの中、今まで入院していた分を。

そして、一ヶ月後、ギプスが取れ、明日から10日程の盆休みに

入ろうかという時。ようやく五ヶ月が過ぎた。僕は意気揚々と保険会社に電話をかける。何回かのコールの後、また野太い男の声がある。

「はい、笹原保険会社の者ですが……。」

「？橋と申します。解約したいのですが……。」

その後、何回か相手側からやめないよう説得が入るが、僕の腹は決まっていた。

「それでは……。」

結局相手側が折れ、無事笹原保険から解約する事が出来た。僕は両手両足を広げ畳に横になった。僕にはもう一つ、頭の中に腹積もりがあった。

「盆休みが明けたら、課長に笹原保険を進めてやろう。」

しかし、僕はこの時気付いていなかったのである。笹原保険会社の恐ろしさに……。これが、悪夢の十日間の始まりだとも知らずに……。

4・解約（後書き）

さて、不吉な前振り残してこの章は終わり

5・1 目目(前書き)

平凡な日常

ピロピロ・・・

目覚ましが、心地よい睡眠の妨害をする。いや、別に心地よいつてわけじゃない……。正直、真夏で寝ぐるしい。汗だくだ。悪い夢でも見たように、体がぐっしり濡れている。それもそのはずと言うか、エアコンついてないんだよ。つけるにも金が無い。特に、あの鼠捕り保険、もとい笹原保険にぼったくられたせいで、肺炎になりそうなくらい懐が寒い。あー、誰かお薬（お金）をください……。全くはつきりしない意識で、無理やり立つ。その瞬間、目の前が霞み、また気を失いそうになる。何とか、テーブルに右手をついて倒れる寸前で止まる。これだから低血圧は……。

布団を押し入れに無理やり入れる。そして、倒れてくる前に素早く閉める。完璧だ！大仕事を終えた自分は、まるで高い山を登り切ったかのような優越感に浸る。山、登った事無いけど……。襟元の乱れたパジャマをそのまま、買っておいたパンにイチゴジャムを塗る。イチゴジャムがあれば何でも御馳走さ！それを口に運ぶ。うーん、このまったりとしていて甘酸っぱい乙女の心（知らんけど）のような味……。しかし、この幸せな一時は唐突に破られた。

ピーンポーン

玄関のチャイムが鳴る。僕はとっさに時計を見る。

(まだ10時。一体誰だろ?)

重い腰をあげ、襟元を正しながらドアを開ける。

「どなたでしょうか・・・?」

「宅配便です!判子をお願いします!」

威勢のいい声が響く。あー、頭にガンガン響くやないか・・・。

(宅配便?身に覚えが無いのだが・・・。)

「分かりました・・・。少し待っていてください・・・。」

朱肉と判子を引き出しから出し、判を押す。帰っていく宅配便の男に、朝は出来るだけ大きな声を出さない方がいい、とだけ告げ部屋に戻る。

さて、何が入ってるか、この箱。差出人の名前が書いてないし・・・。怪しい・・・。まさか・・・、

「生首か!はたまた現金か!これは犯罪の匂いがしますね!」

その匂いのもとをテーブルの上に置き、ガムテープを、面倒なのでハサミで一気に切る。呆気なく開いた段ボールの中をのぞくと・・・、

「ミニカー・・・?」

摘まんで持ち上げると、それは紛れもなく青の乗用車型のミニカー……頭のの中に、5ヶ月前の光景がフラッシュバックする……。中の衝撃吸収材を取り除くと、さらに下から笹原保険の案内が出てくる。これで証拠は全て揃った！

「全く、しつこいねー。あー、怖い怖い。」

お茶らけた感じで、そう言葉に出す。あの保険、また勧誘しに来たよ。二度と入るかかってんだ！そう言っつて、残りのパンを口に頬張る。

午後三時、夕飯の材料が無くなったので、近所の店へ買い物に。白いYシャツにジーパンという格好で、外の蒸し風呂に出る。まだ三時なので買い物客もそこまで多くなく、押し合いへしあいにはならないだろう。今年の3月からレジ袋にも金を払わなければならなくなったので、マイバックを持って目当ての物を探す。とはいっても、男の一人暮らし。買うものは大抵決まっている。

僕は店に入っつてすぐに、目当ての場所へと足を運んだ。中は、心臓に悪いほどクーラーがきいている。しかし、家にエアコンが無い僕にとつては貴重な涼しさ。体全体で涼しさを感じつつ、目的地に向かう。

「あつた、あつた。我が愛しのカップ麺。」

僕は、その中の醤油味を10個ほど籠に入れる。

(さて、後は肉と野菜と……。あ、そうだ、忘れてはいけな
いのが……)

僕は明るく照らされた店の、あるポイントを懸命に探した。それ

は、子供から大人までが楽しめるという、しかし、きちんと見極めなければ恐ろしい目にあう、遊園地顔負けのスポット。そう、それは……、

「お、高級ステーキの試食コーナーだ。」

僕は足早に、そこに駆けつけようとした。しかし、それを売っているおばさんの顔を見て足を止める。

(こいつ……、できる！)

一見人の良さそうな、つまり、食べても無理矢理買わされそう、というオーラを全く放っていないが、手の動きは鋭く、この道のベテランである事は容易に想像できた。そして、匂い、音、全てを使って客を引き寄せようとする。

(危ない、危ない。あの人の食べてたら、一筋縄じゃいかなかった……。)

僕はくるりと踵を返した。しかし、最後の視界に、僕はとらえた。若い男がそのベテランに近づいて行くところを……。僕はこっそりと聞き耳を立てる。

「どうですか、お一つ。」

人の良さそうな声。その仮面の下には悪魔の地声が潜んでいる。

「あ、どうも。頂きます。」

そう言って、恐らくそれを口に運んだのだろう。その瞬間、悪魔

の地声が、まるで津波のような勢いを持って相手をさらう。

「いかがですか？この近江牛。とつても美味しいでしょう？牛だけじゃないんですよ？この特性のタレをかけているからなんです。いまなら、この二つセットで買うとレジにて三百円分の割引があるんですよ！」

「え、あの、ちょっと今月給料ヤバくて……。」

「そんな事言ったら、何時まで経っても贅沢できませんよ？それに、今を逃したらこんなになく買えるチャンス、来ないかもしれないですよ。あ、もしかしたら、鉄板で焼くのが得意じゃないとか？それならね、ここをこうやって……。」

男の人に全く反論の隙を与えない鼠捕り。結局、鼠はそれを買っていったらしい。やり方まで教わったら、買わないなんて流石に言えないようだ。それに、それをかわされても、第二、第三の策があるに違いない。ま、ようするに、餌食わせたら、買うまで帰さない！

「その女子大生さん、いかが？」

後ろを振り返ると、どう見ても二〇代後半の女性。物凄く嬉しかったのか頬がゆるんだ状態で、鼠捕りのチーズを食べた。

（お世辞に弱い、って弱点見せちゃったよ。）

そのお世辞で、買わされるよう仕向けられたのは言うまでも無い。ちなみに僕はと言うと、果物のコーナーでどう見ても素人の店員の説得をかわして、一口サイズのスイカをゲット。

さて、籠に入れたものの清算の時間。僕は店員も、きちんとよく見る主義だ。チャラチャラしたのはかなわない。柔らかいクッキー下にして、箱に入った物を上に置くか？

（一番手前は駄目、まだ若い。二番目も駄目、ケチくさそう。と、レジ袋関係なくなつたんだ。でも、ケチな人の所に行くのはどうも……。三番目もアルバイトっぽいし……。おっ、四番目の人は前にもやってもらつた事がある。すげー、手際いいんだよな。ま、少しばかり作業が機械的すぎだけど。）

結局、四番目の人にやってもらつた。流石と言つかなんというか、すぐさま作業を終わらせるわ、きちんとバランスよくマイバックに詰めてくれるわ。マイバックを片手に、僕は愛しのクーラーの守備範囲外に出る。

ミンミンとうるさいぐらいに蝉。日はもう西に傾きかけていた。というのも、何にしようか全く考えていなかったの、何をかうか相当悩んだのだ。赤色に染まつた坂を登る。夏も真つ盛りなので、この時間でも相当暑い。顎に汗が垂れ、地面に落ちる。マイバックが、そんなに重くないのが唯一の救い。

（あまり買わなかつたからな。）

またクーラーの場所に行く口実を作るためである。それにしても暑い。右手に持ったバックとの境目が、汗でぐっしよりと濡れている。僕は、左手で額にたまる汗を払う。坂を登りきつたところで、子供達とすれ違つ。

「おい、早くしないと日が暮れるぜ。」

麦藁帽子を押さえながら、先頭の男の子がそう言った。

「やべえ、叱られるー！」

「待ってよー。」

少し体の大きい子、眼鏡をかけた子がそれに続く。その子達は、今僕が登った坂を下っていき、やがて見えなくなつた。

「子供は元気があつていいねー。」

家に帰つた僕は、“ホース”にて体を洗い、久々にまともな食事を作つた。そして、就寝。その前に、戸を開けようとしたら大災害が発生。布団の雪崩に巻き込まれた。整理整頓はちゃんとしないとな・
・。

5・一日目(後書き)

とつかギャグがくだらない(T-T)

6・二日目(前書き)

少しでも恐怖が顔をのぞかせます

ピュピュ

暗い闇の向こうから、魔王の声が聞こえてくる。心地よい楽園から、引きずり出そうとする魔王の声が……。そうはいくものかと、必死でしがみつくが、敵軍は“蒸し暑さ”という名の紳士を導入。紳士らしからぬ、猛烈な攻撃に、もはや、成す術は無かった。

音がピタリと止む。それは、我が軍が降参した合図でもあった。

「う……、頭……、いてえー……。」

もはや、敵との戦いで体力を使いきった私は、目の前が霞んで見えるほど、ひどく衰弱している。

（ま……、まずい、回復アイテムを……。）

喉がひどく乾いている。台所へ……、台所に行かないと……。僕は地面を這いながら、必死に“セーブポイント”へ向かった。セーブポイントに行けなければ、途中で意識がブラックアウトし、いつの間にか起きるところに戻されてしまう……。

（そうはいかない……。）

ようやく、セーブポイントにたどり着いた僕は、水道の淵を持ち、必死に体を上にあげる。そして、左手でコップを探り、右手で蛇口をひね……、

(く、こんなところにも魔王軍の罠が……)

蛇口はひどく固く締められていて、衰弱している僕には厳しい“罠”だ。手に力が入らない……。しかし、最後の力を振り絞る。

(なめんなよ……！)

キュッ！威勢のいい音が鳴り、水が流れ始める。

(やった……！勝つ……、)

しかし、蛇口をひねった勢いで、僕の体は耐えきれなくなり横転。しかも、徐々に意識が遠くなっていく……。

(駄目だ、寝るな……。まだ、セーブを……。)

どれぐらい眠っていただろうか……。ふと、何かの音で目を覚ます……。それは、今もずっと開けっ放しになっている蛇口から出る水音では無かった。

(今のは……。呼び鈴……。？)

僕は、必死に両手で地面を押し体を持ち上げる。そして、手に握られていたコップで、流れ出る水をすくい、一思いに飲み込む。その途端、自分の中に一筋の風が流れ込んだような感覚にみまわれる。

(あー、なんて気持ちいいんだ。)

爽快、生き返った、なんて言葉では語る事が出来ない。もっと別の……、何かなのだろう。

ピンポーン

「あ、忘れてた……。」

僕とした事が！あまりの爽快感に、迷子の子猫の事を忘れていたではないか！くそ、おまわりさん失格だ！僕は、出来るだけ早く任務を遂行すべく、勢いよく起き上がる。

クラッ……

その瞬間、酷い立ちくらみを起こし、目の前が真っ白になる。あまりのひどさに、体が後ろに倒れかけるも、すんでのところで立ち止まる。くそっ、敵軍め！遅効性の魔法を使いやがって！僕は、その魔法を振りほどくと、重い足取りで、ボロボロの恰好のまま（恐らくは髪もボサボサだろう）、迷子の子猫に会いに行く。

「はい……。誰でしょうか……。？」

自分でもやけにしゃがれた声だと思う。重いドアが開き、その向こうにいたのは、迷子の子猫では無く、見覚えのある赤ずきんちゃんだった。

「宅配便です。判子お願いします。」

……。どうやら昨日の忠告を覚えていたらしく、声は小さかった。……。しかし、敵の罠の効力が続いていて、頭がグワングワンとなつている自分には、それだけでもきつかった……。赤ずきんちゃん

んはどうやら、野原で拾ったお花を届けてくれたらしい。まあ、そんな茶色っぽくて、直方体の形をした花なんかそうそうないだろうが……。

(てか、誰から……?)

頭の中に一つの予想がたつ。だが、それをすぐに振りほどく。まさかな……。僕は、朱肉と判子を取って戻り、判子を押す。そうして、お花を受け取った後、僕は狼に化けたりするわけがなく、そのまま赤ずきんちゃんは帰っていった。今は、青い帽子の赤ずきんちゃんもいるんだな……。

(でも、本当に誰から……?)

……。! 差出人の名前が無い……。頭の中で最悪の連想が駆け巡る。“茶色い花”をテーブルの上に載せ、ハサミで切っていく。

(よし、開いた!)

すぐさま、手を衝撃吸収材、通称“プチプチ”の中に入れて、何が入っているか探る。その結果、同じ形の小さな固形物が五つ、入っているのが分かった。僕は、その形を手で確かめ、確信する。しかし、どうにも信じたくなく、それらの固形物体を一度に全て持ち上げる。

……。色とりどりの固形物体の型は、滑らかな曲線を描き、サイドミラーから反射する光が目くらませる。間違いなかった……。赤、青、黄、緑、黒。何かの戦隊物を思わせる、それらの物体はミニカーであった……。しかも全て乗用車型……。僕は、昨日の記憶をたどり、段ボールの底を探す。やはり、笹原保険の案内が入っていた。

「全く、しつこいなー……。5個に増やしても一緒なのに……。まあ、今日はゴミの日だから、出しに行くか……。って、やばっ！もう、こんな時間！」

ふと、時計を見ると、ゴミ回収の車がやってくる時間3分前！僕はすぐさま、燃えるゴミの袋を開き、そこらに散らかっているカップ麺の蓋と箱、それとミニカーを昨日の分と合わせて、六つ入れる。そして、その袋片手に、今にも壊れそうな木製の扉を勢いよく開け、炎天下の中、全力疾走で目的地に向かう。さつき、一杯飲んだだけの水。その貯蓄ももうなく、喉の渇きとも戦わなければならなかった。幸い、ゴミ出しの場所は非常に近い。

(あの角を曲がれば……。)

F1レーサー顔負けのドリフト走行で、華麗に右に曲がる。幸い、まだ来ていなかったらしく、ゴミ置き場にはまだゴミがあった。僕はふう、と一度溜息を吐き、急に重くなったゴミをよっこらせと置く。ちょうどその時、ゴミ回収の車が来て止まる。

「おはようございます。」

僕は息を乱している事を悟られぬよう、冷静を装い、中から出てきた作業員達二人に挨拶をした。

「あ、くくく、お、おはようございます。」

「おはよう、くくく、ございます。」

どうしたわけか、僕の方を見て笑う作業員。その二人は笑いをこらえながら、次々とゴミ収集車に入れていく。全てが終わると、僕の

方に作業員の一人が笑いながら話し掛けてきた。

「急いでいたのは分かりますが、その、くくく。」

え、何で分かったんだ・・・？急いでいた事・・・。僕が呆気にとられると、作業員の男が驚愕の事実を話した。

「その、格好は、いかがなものかと。くくく。」

・・・！僕はすぐに自分の服を見る。パジャマのままだった。しかもヨレヨレ・・・。髪はボサボサ。

(僕、この格好ですつと走ってたのか・・・？)

作業員の男達は腹を抱えながら車に乗り、去っていった。一気に恥ずかしさのこみあげた僕は、隠しきれぬ筈がない服を手で隠しながら、全力疾走で我が“城”に戻った。アパートに着くと、階段を全力で駆けのぼり、開きっぱなしのドアから、中に転がり込むように入る。そして、勢いよくドアを閉めた。

「参った、参った。顔から火が出るほど恥ずかしい。もうお婿にいけないじゃないか！」

何時火が出てもいいように、台所に向かう。と言っても、もう一杯水が飲みたいだけだ。蛇口は緩く閉めていて、少しひねっただけで簡単に水が流れる。僕はそれを金属製のコップですくい、喉に流し込む。

「ふう、生き返るな・・・。」

1UPした僕は、朝御飯の準備をする。とは言っても、カップにお湯を流し込むだけでできるのだが・・・。僕はビニール袋を手で手

繰り寄せ、中を探る。

(カップ麺、カップ麺、ん……?)

手にカップ麺の円柱の感触では無く、小さな固形物の感触がぶち当たると。頬に汗が流れた……。

(まさか……。)

僕は、勢いよくその固形物を持ち上げる。果たして、それは黒の乗用車型ミニカーであった……。

(なんで……?)

僕は部屋全体を見渡した。すると、去年社員旅行で行った沖縄で買ったシーサー人形の影に、一つ……。湯沸かし器の横に、一つ……。テーブルの下に、一つ……。

「何なんだ！何でミニカーがあるんだよ！」

テーブルの上には合計四つのミニカー……。

(昨日はこんなの無かったのに！何時の間に！何時の間に……？ん、待てよ?)

僕は朝の行動を思い返していた……。

(朝起きて、水を飲もうと台所に行っただけど寝ちゃって……、その後、チャイムで目が覚めて、宅配便を受け取った後……、ミニカーを捨てようって事に……。だけど、時間がやばくて、それで

外に出・・・、あつ！)

そうだ、あの時、ドアを開けっ放しにしてた！その間に誰かが入って、こんな事を！

(誰か・・・?)

僕は、ミニテーブルの上に置いてあった自分の携帯を手取る。メールが何通か来ていたが、それを無視して、もう埃まみれになった資料にある電話番号をプッシュする。

(こんな事するのは、あいつらしかいない！)

プッシュし終えた後、携帯を耳に運ぶ。何回かのコールの後、低い男の声が聞こえた。

「はい、こちら笹原保険会社の者ですが・・・。」

「この前、解約した？橋と言ってますが！」

無意識のうちに語気が強まった。相手はそれに一瞬ひるみながらも、すぐに明るく返してきた。

「あー、？橋さん。やっぱり解約するのをお辞めになるんですか？」

「な訳ないでしょ！それより、もうこんなストーカーまがいの事やめてください！」

「はっ？」

「とぼけたって無駄ですよ！毎日ミニカー送ってくるのも、今日無断で部屋に入ってミニカー置いたのもあなたたちなんでしょ？」

「え、何の事でしょうか？」

「とぼけるな！もうミニカーを送ってくるのはやめろ！」

流れ出てくるような言葉を全てぶつけ、反論が来る前に電話を切つてやった。僕はふう、と溜息を吐いた後、カップ麺にお湯を注いだ。次のゴミの日は明々後日。それまで、ミニカーはこの家に置いておかねばなるまい。僕はカップ麺が出来るまで、携帯のメールをチエックした。

6・11日目(後書き)

さて今回はこのまじ

7・三回目(前書き)

ギャグ回

ムムム

南海の孤島で、鍋焼きうどんを夏にこたつで食ってた僕を、天使様の一声が救い出してくれた。僕は汗だくになりながら、左手を伸ばし、天使様の頭に触れる。

今日もまた、体がびしょ濡れだ。体中の水分を絞り出したかのような、大洪水の汗をかいている。質の悪いパジャマは、その汗を全く吸い取らず、体に不快感を残しまくる。布団は、寝てる間に全てどけてしまったらしく、部屋の隅に、しわしわになった状態で発見された。喉の渇きが尋常じゃない僕は、とにかくゲームオーバーになる前に、セーブするため台所に向かう。

一日一回だけ挑戦できるこのチャンスを無駄にはできなく、全く疲れが取れていないボロボロな体で地面を這い、セーブポイントに近づく。

(昨日のような失敗はしてたまるか・・・！)

何とか、台所に着いた僕は一気に両手で地面を押す。完全に直立の状態になった僕を、魔王軍の“立ちくらみ”という罠が襲う。僕はすんでのところで立ち止まり、金属性のコップを手に、セーブポイントの蛇口をひねろうとする……。しかし、ここにこそ、本当の罠が仕掛けられていたのであった。

(えっと・・・、蛇口は・・・。・・・！何てこった・・・。こんな罠ありか・・・?)

蛇口には奴がいた。どんな人間でも、その姿を見ただけで悲鳴をあげ、恐れると言われる……。しかも、何処にでも生息し、音速並みの速さと飛行能力、究極のしぶとさを兼ね備えたゲームのラスボス顔負けの強さ……。さらに、何処にでも侵入が可能な薄さである。そう、究極生命体と言っても過言では無い……。

「ゴキブリ！くそ、魔王軍め！」

ゴキブリは、その黒い触角を不気味に動かしながら、まさに、図っているかのように蛇口の上でピタッと止まっている。

「くそっ、どっか行け！」

嫌だと言わんばかりに、蛇口の周りを走り回る究極生命体。しかも、僕は虫さえも殺した事が無いのだ。だって、かわいそうじゃん！この敵にも、同情を抱いてしまう。仕方ないので、重い腰を動かし、ティッシュペーパーで素早く捕まえ外に投げる。この行動はもう慣れた。しかし、これで相当な体力を使った……。僕は最後の力を振り絞り、蛇口をひねり、コップに水を入れる。そして、それを口に流し込む。ステージクリア！ランクは……、

D

Dだと……？

(て、待て……。誰だよ？ランク出したの誰だよ？)

その意見に答えてくれる奴はいなかった……。

僕は雪崩が起きないように、丁寧に布団をしまい込んだ後、イチゴジャムをこつてりと塗った食パンを頬張っていた。正直暑い……。まるで蒸し風呂の中にいるかのような暑さである。窓は全開に開けているが、エアコンも扇風機も無いのは流石にきつい。しかし、それを買う金が無い。

僕は基本的に音楽に興味が無く、外も静かで、さらにはラジオすら持っていないので部屋の中は閑古鳥が鳴いた町のようにシーンとしている。その静寂も今ではすっかり慣れ、それどころか、自分の世界に浸っているようで、心地よくも感じたりしている。

(昨日、あれほど口を酸っぱくして言ったからな。今日は誰も来ないだろう。)

ピンポーン

静寂が、まるで風船のように粉々に消え去った。そして、僕の頭の中に予感が過ぎる……。

(まさか……？いや、昨日あれほど……、)

恐る恐る立ち上がり、ドアに近づく。壊れそうなドアに寄りかかり、覗き穴から覗く。

(う、嘘だろ……。)

果たして、そこには青い帽子をかぶった……。昨日までとは違う配達業者の人間がいた。段ボール箱を持って……。

「はぁ……。」

溜息しか出なかった。僕は頭をぼりぼりと搔いて、ドアを開ける。外にいた白髪の老人は、僕が出てくると笑顔を向け、左手で帽子を掴み軽く頭を下げた。

「宅配便です、判子をお願いします。」

さすが年配者と言うかなんというか、僕の姿を見て声を小さく絞ってくれた。

「はい、分かりました……。」

もう一度盛大に溜息を吐き、判子と朱肉を取ってくる。判子を押し、老人はまた一礼して帰ろうとする。しかし、それを待ち構えていた奴がいた。

「うわー！」

老人は小さく悲鳴をあげ、一歩後ずさりする。そこには、さっき僕が捨てたであろう究極生命体がいたのである。

「くそ、ゴキブリめ、あっちへ行け！」

手近な石ころを地面から拾い、ゴキブリに向かって投げる老人。幸い、ゴキブリには当たらなかったが、老人は2発目、3発目を手にとり、投げつける。

「待つてください！」

思わず体を前に出し、投げられた石をキャッチする僕。段ボール箱

が地面に落ちる。その僕を、思いつきり目を見開いて見つめる老人。そして、ゴキブリはどこかに消えた。

「に、兄ちゃん……。何で……。？」

「可哀そうでしょう。いくらゴキブリでも、命はあるんですから……。」

「でも、人間に何の利益も与えねーし、むしろ害を……。」

「それは人間主観の話です。彼等にも、この世に生まれたのだから、生きる意味がある筈です。それを潰してしまうのは、あまりにも可哀そうです。それに、身勝手です！」

老人の男は、しばらくボーツと呆けていたが、しばらくすると笑顔になった。

「兄ちゃんは……。優しいんだな。」

「え……。？」

予想外の事を言われて、今度は僕の目が丸くなる。老人は、そんな僕を見てはにかみ、手を振る。

「じゃあな。兄ちゃんなら、良い嫁さん見つかるぜ。」

そのまま老人は去っていった。僕は数秒後に意識を取り戻し、地面に落ちた段ボール箱を拾った。

(優しい……。か……。)

頭の中でその言葉が、縦横無尽に駆け巡る。少し気恥ずかしくなり、慌てて家の中に入る。

(ま、まあ、最後の言葉だけ、有難く受け取っておこう。)

無理矢理、そう思って恥ずかしさを閉じ込める。しかし、嬉しさのあまり、自然と心が弾んでしまう。気だるい状態から一気に元気になる。でも、手に持っている“重さ”を思い出すと、また気だるくなる。

「全く、また送ってきやがって。」

いつもと同じ要領で、段ボール箱の封印を解く。そして、衝撃吸収材の中を探ると固形物が一つ、手に当たる。

(どうせ、ミニカーなんだから……。)

僕はそれをつまみ、目の前に持ち上げる。しかし、それはミニカーでは無かった……。

(ミニ……、ヨンク……。ミニヨンクだと……?)

僕は前日の記憶の糸をたどった。そして、あの時のセリフを導き出す。

(とぼけるな!もうミニカーを送ってくるのはやめろ!)

(ミニカーを送ってくるのはやめろ!)

(“ミニカー”を……。)

がくつと膝が折れ、地面につく。

(揚げ足を取るような事しやがって……!)

自然と拳に力が入った。

7・三回目（後書き）

動くようになりました

8・四日目（前書き）

なんか、前日に気分で載せた「バカップル探偵」のユニークアクセス数がこれを既に超えているのですが・・・

ピュピュ

遠くから、幸せな結婚生活という夢から、引きずり降ろそうとする声がある。僕は離すものかと、必死にしがみついてやる。しかし、次第に声は大きくなり、そして・・・、

(・・・。ここは何処？今までの幸せな生活は一体・・・？カムバック、マイドリーム・・・。)

いや、そこはマンションの畳の上って事は分かるんだけど・・・。無理矢理、現実世界に戻された僕は、しばらくそのまま呆けていた。しかし、喉の渇きにどうにも耐えられなくなり、体を起こす。立ち上がった時の立ちくらみは、今までよりはひどくなかった。

僕はそのまま台所に向かい、コップを手に取る。そして、蛇口に魔王軍の罨が無いか確認し、水を出して喉の奥に流し込む。

(やっぱりうまい。朝起きた瞬間の水は格別にうまい。こりゃ、癖になる！)

ようするに、喉が限界まで渇くまで寝るって事ですね、分かります。こうして、僕は将来の誓いを立てた。

その後、僕はパンにイチゴジャムを塗って食べる。

「もう、食材が尽きたな・・・。また買いに行くか。」

カップ麺(醤油味)しか入っていないビニール袋を、しげしげと見つめる。それに買い出しに行けば、あのクーラーの涼しさを楽しめ

る。それに試食コーナーもだ。

「今日の試食は何かな？この前スイカだったし、今日は肉が食いてえな。」

勝手に妄想を膨らませて、ご機嫌にパンをかじる僕。しかし、ある試練があつた事を僕の頭は完全に忘れていた。

ピンポン

(聞こえない！僕には何も聞こえない！)

しかし、外の人は何も悪くないので待たせるってのはどうも……。

「はあ……。」

最大級の溜息を吐く。気が進まない足を前に出し、ドアを開ける。

「おつす、兄ちゃん。」

老人は軽い感じに挨拶してきた。昨日会ったからなのか、物凄く親密な感じで話し掛けてくる。

「はい、おはようございます……。」

出来ればこちらも親密に返したい。しかし、手に持っている“物”

を見ると、どうにもテンションが下がる。

「兄ちゃんも二日連続とは奇遇だねー。誰からだい？ひよっとして恋人からか？」

「……。ええ、切ろうとしても切れない関係にある人間からです。」

「憎いね〜。このこの。」

笑顔で、僕に右肘をぶつけるような動作を繰り返す老人。

（本当に、嫌な恋人に付きまとわれちまったな、僕……。）

もう一度、溜息を吐く。

「判子と朱肉ですよね。少し待っていてください。」

いつも通り（悲しいな）、判子と朱肉を引き出しから取り出して押す。老人は、段ボール箱を僕に渡す。

「じゃあ、兄ちゃん。何か贈り物あったら、俺んとこの利用してくれよ。それじゃあ、また……。」

そう言つて、老人はマンション下の車に向かい、白塗りのドアを開け乗った。車はすぐに発進し、道路を右に曲がり見えなくなった。僕は、暑くなってきたので部屋に戻った。

（“また”が、明日じゃなきゃいいが……。）

一抹の不安を抱え、段ボール箱をテーブルに置く。何時もの要領で素早く開け、中を探ると戦隊物を思わせる色取り取りのミニヨンク。

全部で五つ。赤、青、緑、黄、黒。相変わらず女性がいない！しかも全部、乗用車型と在り来たり！もう一度溜息を吐き、朝飯の残りをかじった。

御飯を済ませた後、用を足し、マイバツクを持って買い物に向かう。真夏日の太陽の暑さがジリジリと照りつけてきて、今更ながら、帽子をかぶってくれば良かったと後悔した。右手を軽く自分の髪に当てる。

「あつっ！」

右手が相当な熱さを感じ取り、思わず手を引つ込める。しかも、今の時間は10時。帰り際には炎天下になる訳で……。

「急ごう……。」

少し足を速める。速めるが……、上り坂に到達する。しかも、街路樹の陰はさほど伸びていない。つまり、炎天下を遮る手だてが無い。溜息を吐き、意を決して長い上り坂を登っていく。

「はぁ……。はぁ……。暑い……。」

喉がひどく乾いていた。足を進める度、全身から悲鳴が聞こえてきそう。この坂を登ると、公園があり、しばらくは下り坂となる。そして、その下り坂が終わったところにデパートがある。

「まだ……、登りきれねえのか……。いい加減……、疲れた……。」

あまりの脚の重さに、自分の足じゃないのでは、と疑ってしまう。引きずるような感覚で脚を動かし、どうにかこうにか登りきる。

「はぁ……、はぁ……。」

両掌を膝の上のせ、息を整える。しかし、息は整えられても炎天下のせいで、喉の渴きは最高潮に達している。

(……、やむ終えん……)

体の向きをかえ、木が多く、水が飲める公園に行く。その公園は広く、砂場はあるし、グラウンドもある。滑り台もあって、おまけに鉄棒。いろんな遊具があり、この炎天下の中だというのに、沢山の子供が遊んでいる。僕はそんな遊具には目もくれず、真っ直ぐ水飲み場に行く。そして、銀色に光るつまみを回そうとするが……、

(熱っ！)

思わず、手を引っ込める。つまみの部分は炎天下のせいで、まるで鉄板のような暑さになっていた。

(こんな所にまで、敵軍の罠が……。できれば、避けて通りたいが……)

しかし、僕の喉の渴きはもう待つてはくれ中た。

(何を迷う！男が、敵を目の前に逃げ帰ってはいけない！男には、やらねばならぬ時があるのだ！)

意を決して、僕はつまみに手をつける。熱いのを無理やり堪え、つまみを自分の方向に回す。

(今だ！)

吹きあがる水を、自分の喉で受け止めていく。その聖水は喉を潤し、さらにはつまみにかかつて、熱さを発散させる。もう自分の手に熱さは感じなかった。今は只、湧き上がる聖水を貪るだけだった。

「ふう……。」

胃袋に満タンになるまで水を流し込むと、僕は一旦、木陰のベンチで休憩を取る事にした。木製でできたベンチは薄汚れていて、茶色だと認識できない。良くて焦げ茶だ。蝉はうるさいぐらいに鳴き、蒸し暑さを強調している。そこにドカッと座り、マイバツクを放り投げ、僕は公園で遊んでいる子供に目をやる。

「だーるまさんがこーるんだ！」

鉄棒の支柱に頭を埋め、そう言ってクルッと振り返る女の子。それを合図にその支柱に向かってる女の子達、四人ばかりがピタッと制止する。

「待てー！」

グラウンドの方では、男の子、八人ぐらいが一人の男の子から逃げ回っていた。その男の子が鉢巻きをつけている事から、恐らくは鬼の目印だろう。

(この暑いのによくやるよ。)

「よし、みんな。用意はいいか？」

砂場の方では、何やら男の子（しかも中学生ぐらい）が裸足になって、靴を砂場の外に置く。

「いいか？最初に音をあげた奴が、昼飯おごるんだぞ！」

「おー！」

そう言つて、全員で一斉に砂場に足を置いた。全員の顔がみるみる歪んでいく。しかし、誰ひとりとして何も言わない。恐らくは、我慢勝負なのだろう。炎天下の砂場の砂の熱さといつたら……。全員の苦痛に歪む顔を見ているだけで、足がどんどん熱くなってくる。

「そろそろ行くか。」

重い腰をあげ、公園を出て、坂を下っていく。上り坂では無いが、直射日光はやはりきつい。水分が出尽くしてしまう前に、足早にデパートに向かった。

自動ドアが開いた途端、外とは差がありすぎるほどの冷気が体全体に透き抜ける。その心地よさに、顔が綻びそうになるのを我慢し、奥へと脚を進める。

軽快な音楽が響く、少しばかり寒い店内で、まず一番最初に向かったのは勿論、

「あつた、あつた。じゃ、いつも通り醤油味を、つと。」

カップラーメン醤油味を発見した僕は、行き違う人にぶつからないようにそれに近づいた。

（まだ家に2個あつたから……。）

カップラーメンを6個、籠に入れる。次に野菜コーナーに行き、消

費期限等を確認して必要な分だけ入れていく。途中、公衆でイチヤつくカップルがいたのでむかついた。

（日本政府は公衆の面前でイチヤつくカップルを、禁固5年とすべきだ！）

無茶苦茶な事を考えながら、肉売り場に向かう。

（ええつと、豚肉は・・・、）

「お兄さん、ステーキどうだい？」

「あ、有難う御座います。」

自然な感じで出された、爪楊枝のついた駒切りステーキを口に運ぶ。塩で味付けされた牛肉の肉汁が、口一杯に広がって気付く……。

（や、やべえ……。つかまった……。）

目の前のおばさんは3日前、沢山の人間を陥れた伝説のスナイパーだった。スナイパーの目は、怪しい光彩を放っていた。

「お兄さん、」

刹那、僕は豚肉だけ取って逃げだした。次の言葉が出るまで待つてたら、確実に買わされる。

（男が、敵を目の前に逃げ帰ってはいけない！）

先程、立てたこの誓いを一瞬で破る。

（僕だって命が惜しいさ！卑怯だとなじるがいいさ！）

誰に向かって言い訳しているのか、自分でも理解できなかった。

（振り向くな、振り向いたらやられる！）

その後は普通に会計を済ませ、炎天下の中をえっちらほっちら歩き、家に帰った。

8・四回目（後書き）

ひとまずギャグパートはここまで、これから徐々に怖くなります

9・五目目(前書き)

つまらない小説ですがこれから下り坂です

9・五回目

プンプン

底なし沼に全身が浸かった頃、神の声により、どんだん体が浮いていく。そして・・・、覚醒。

僕は、布団をどかした状態で寝ていた。体全体が、汗でぐっしょりと濡れている。濡れるのはいつもの事だが、濡れ方が尋常じゃなかった。そして、すぐさま部屋の異常に気付く。

(部屋、暗いな。それに、外から音も・・・。)

僕は窓から外を見る。外の光景は・・・、正に地獄だった・・・。雲と言う名の親が、水という我が子を、地面に突き落としていたのだ。早い話が土砂降り。僕は、地面に落ち、弾けていく、億千を越える子を、暫しおぼろげに見つめていた。

物凄い湿気のせいで、気分が優れないが、まずは水を飲み台所に向かった。水を喉に通しても、先日のような快感は無かった。ようは、水分が足りてないのに、湿気のせいで喉が渴いていないのである。

「昨日のうちに、買い物済ませといて良かった・・・。ん？」

僕は、自分の脳内にひっかかりを感じた・・・。何か忘れてる気がする・・・。雨の音だけが響く部屋の中、僕は頭の中の記憶を引きずりだした。

(あ、そうだ！今日、ゴミの日じゃないか！早い所、ミニカーと

ミニヨンクを捨てに行こう。)

僕はゴミ袋にテキパキと、カップ麺の蓋やらカップやら、パンの袋をいれ忘れずにミニカー、ミニヨンクも入れる。

「ふう。」

湿気がひどいせいで、このくらいの労働でも皮膚がヌメヌメする。額に浮き出た汗を、手の甲で拭きとる。

「さて、捨てに……」

ピンポン

(ははははは。まだ捨てるゴミがあった。)

ゴミ袋を一旦畳の上に置き、判子と朱肉を持って外に出た。もう、外にいる者の正体は疑いようが無いからだ。

「よつす、兄ちゃん!」

湿気をものともせず、威勢のいい声で話し掛けてくる老人。手に持っているのは、やはり段ボール箱である。

「判子ですね。」

僕は判子を押す。

「それにしても、三日連続とは相当惚れこまれとるね。」

「だから、いったでしよ。切ろうとしても切れない関係なんですよ。」

「大事にしてやれよ。」

それだけ言うと、老人はにこやかに笑みを浮かべ、僕の方に手を振り、帰っていった。

(すみません。大事にだけはしません。)

テーブルの上に段ボール箱を置き、ガムテープを剥がして、中を覗く。

(~~~~~!)

黙るしかない。中の衝撃吸収材の量が明らかに減っていて、ミニヨンクが軽く十個ほど入っていた。勿論、中身はすぐにゴミ袋に入れ、袋の口を縛る。

「さて、早めにいかないと。」

僕は作業員の人達に笑われないよう、素早く服を着替え、黒色の長い傘とゴミ袋を持って外に出る。

(おっと、忘れるところだった。)

僕は、すぐさま家の鍵をとり、中に戻り、外に出て、鍵を閉めた。

「また、ミニカー置かれてたら、たまんねーもんな……。」

無意識のうちに、語尾の調子が下がる。少し肩を落としながら、傘を広げゴミ捨て場に向かった。傘に雨が当たる音を、聞きながら道を歩く。ゴミ回収の時間には余裕で間に合い、ゴミを置いて、すぐさま踵を返した。

雨のせいで、靴下に少し湿り気がでてくる。一旦足を止めて、足元を見てみた。皮靴もびしょびしょに濡れていて、溜め息を一つ漏らす。

(僕には、これを洗ってくれる良い人がいないんだよね……。)
もう一度溜息を吐くと、脚を再び動かした。階段を上り、自分の部屋の前で少し傘の水を切る。マナーがどうこう言われるかもしれないが、床は吹き込んできた雨でビショビショである。水を切り終わると、僕はポケットから鍵を取り出し、ドアを開ける。

(……！)

一瞬、自分の部屋の光景が理解できなかった……。思考が回らなかった。そして、数秒の後、声がようやく出た……。

「な、な、なんで……。」

部屋の中を所狭しと、ミニオンクが走り回っていた……。それも一台では無い。五台、いや十台はあるだろうか……。部屋の中に、雨音よりも大きいジーツという、タイヤを動かす音が響いている。それも、十台なのでかなりうるさい。

「なんで……、鍵も……、きちんと掛けたのに……。何でな

んだよ……。」

僕の頭の中は、怒りの感情より、恐怖の感情が多くを占めていた……。そのまま、僕はその場に長い間、立ち尽くしていた……。十分ほど立ちつくした後、意識が戻り、ミニヨンク全てを捕まえ、中から単三電池を取り除いた。結局見つかったのは十二台。それらが全て、机の上に置かれていた。もう、ゴミ収集車は言ってしまった時間なので、また四日後に捨てに行かなければならない。

「それにしても……。どうやって……。」

ドアには鍵が掛かっていた……。こじ開けた形跡もない。窓にも鍵はかかってたし、それよりなにより、ここは二階。入るなんて事は不可能だ……。

(一体、どうやって……。)

これじゃあまるで、幽霊みたいに入ってきたって事になる。

(幽霊……?)

頭の中に、浮かび上がってきた言葉に、背筋がゾツとした。

(ま、まさか……。いやっ！そんな訳が無い！)

頭を思いっきり左右に振って、馬鹿馬鹿しい考えを振り払う。

(そうだ、そんな訳が無い！こんな事をやるのはあいつらしか、いないじゃないか！)

僕は床に転がっている携帯電話を開き、もう打ち慣れた番号をプッシュする。何回かのコール音の後、低い声の男がでた。

「はい、こちら笹原保険会社の・・・、」

「何なんだ！あんたらの保険は！」

相手が、全てを言い切る前に怒鳴りつけた。

「あ、あの・・・、」

「ふざけやがって！人の部屋に勝手に入らんかしやがって！」

「あの・・・、その・・・、何の事でしょうか・・・？」

「しらばっくれるな！こんな事すんのは、お前らしかいないだろ！」

言葉が止まらなかった。いつもの自分では考えられない程、声を荒げていた。

「大体何なんだ！毎日！毎日！ミニカーが駄目だと言ったら、ミニヨンクって何なんだよ！動くようになっただけじゃないか！」

「あの・・・、もしかして、？橋さんでしょうか・・・？」

「その通りだ！ふざけんなよ、お前ら！今度から、宅配便は来ても受け取らねーぞ！さっさと諦めやがれ！」

「あ、ちよつと、？橋さ・・・、」

相手に反論させないように、素早く電話を切った。その後、何回か電話にコールが来たが、全て、でなかった・・・。

その後、朝飯兼昼飯を食べ、部屋の中でジーツとしていた。雨は多少勢いを弱め、ポツポツ降りになっていた。それが、僕の中の恐怖をより一層、・・・引き立てていった・・・。

9・五回目（後書き）

もう、ギャグには戻りません

10・6日目(前書き)

さて、お盆休みがとうとう半分を切りました

僕は、暗闇の中を一人佇んでいた……。立っているのか、座っているのか……。？床にいるのか、天井にいるのか……。？右はどちらなのか、左はどちらなのか……。？そもそも、ここはどこなのか……。？それとも、どこでもないのか……。？ただ分かるのは、遙か遠くから音が聞こえてくる事だけ……。その音を聞き取ろうと、耳を澄ましてみるが……、

。。。。

悪魔の声に邪魔された……。そして、僕は覚醒した。昨日程の湿気は無かったが、窓から照る、強い日差しに、お世辞にも気持ちの良い目覚めとは言えなかった……。

僕は体を起こし、いつも通り水を飲む。心地よい爽快感が体に流れた後、布団の方へと戻る。

。。。。

ミニテーブルの上の物体に、思わず目があった。その瞬間、元々低かったテンションが、一気にどん底になった。そして、昨日の恐怖が少しづり返ってくる。

（。。。。ハッ！いかん！いかん！）

すぐさま頭を左右に振り、雑念を払うも、少し体は震えていた……。ミニヨソクを見てる事が耐えられなくなり、慌てて目を奥の棚の上に向ける。

(・・・え？ミニカー？)

僕はすぐさま、棚に近づき、それをじっとよく見る・・・。

(あれ・・・？)

そこにあっただのは、社員旅行に沖縄に行った際の土産の、シーザ
ーの置物(かなり小さい)だった。

(これと、見間違えたのか・・・。駄目だ、休みだつてのに・・・
)

僕は、古ぼけた天井を仰ぎみる。

(相当、疲れてるな・・・。)

大きく溜息を吐き、そのまま暫く立ちつくした。

布団を畳んで、押し入れに詰めた後、パンにイチゴジャムと、い
つもの朝飯を食べる。その最中、頭の中には一つの事しか思い浮か
べていなかった。

(今日は、宅配便、絶対断る！何が何でもだ！でなきゃ、こつち
の身が持たない！・・・でも、)

朝食を掴む手をとめ、また、天井を見る・・・。

(受け取らなかつたりしたら・・・、あの人、迷惑するかな・・・
?)

頭の中に、人の良い、気軽な老人の姿が思い浮かぶ・・・。

(良い人そうだし・・・、出来れば迷惑はかけたくないな・・・
・・・って、)

頭を、また思いつきり左右に振る。

(イカン！イカン！そんな容赦を与えてちゃ、奴らの思いつばだぞ！)

あれやこれやと思考を張り巡らせる。その時・・・

ピンポーン

ドツクン・・・。心臓が、その音を聞いた瞬間、一気に鼓動を速めた。息が少し荒くなり、先程水を飲んだばかりなのに喉はカラカラになる。僕は意を決して立ち上がり、ドアに向かった。勿論、判子と朱肉は持たずに・・・。ドアの前で、一旦立ち止まり、胸に右手を当てる。

(落ち着け・・・。落ち着け・・・。)

息を整え、心臓の鼓動を抑えていく・・・。そして、ドアのノブに手をかける。

(断れ！断るんだぞ！)

木製のドアが、ガチャリと開く。そして、そこに待っていたのは……、

「よっす、兄ちゃん。」

悪気のない、人懐っこい笑みだった……。その瞬間、僕は一気に恥ずかしくなった。居心地が悪くなった。

（僕は、この人に迷惑をかけようとしたのか……。この、何の邪気もない、眩しすぎるほどの笑顔を……。）

僕には、もう、こう、言うことしかできなかった……。

「あ、判子、ですね……。少し、待ってください……。」

居心地が悪い、この場から一刻も早く離れたくて、中に戻り、判子と朱肉を取ってくる。

「お待たせしました……。」

僕はそう言っ、判を押そうと、判子を近づける……。

「兄ちゃん……。」

判子を持っている手を止め、顔を老人の方に向ける。いつものように、元気のある声では無かったので驚いて、思わず向いてしまったのだが、老人の顔を見てまた驚く。眉が垂れ、明らかに、元気がない顔になっていた。

「これ、本当に恋人からかい……。流石に、四日連続するのは、

おかしいだろう……。ひよつとして……。ストーカーか、何かじゃないか？良かったら、相談、乗るぞ。」

優しい言葉をかけてくる老人に、さっきまで自分のやろうとしていた事を思い返し、ひどく後悔していた。この老人は、全く関係のない赤の他人の事に対して、これほどまでに心配してくれる人なのだ。

(そんな素晴らしい人なのに……。僕は……)

目が急に熱くなってくる。何とか、液体を流すのを食い止め、老人に話しかける。

「実は……、」

と言いかけて、口を嚙んだ。こんな事を他人に話しても、笑われるのではないか、信じてもらえないのではないか、という気持ちになっただからだ……。しかし、

「実は……？」

真剣そのものの表情で僕の表情を覗く、この老人がそんな事をしないと信じ、口を開いた。

「実は……、」

僕は要点だけまとめて、老人に今までの経緯を話した。

「……と言っわけです……。」

全てを語り終えた後、笑われてやしないかと、老人の表情をチラッと覗く。しかし、老人にそんな気配は全くなく、真剣な目つきのままだ。

「保険会社が……、ねー……。」

「あの……。」

僕の口から言葉が漏れた。

「ん？何だ？」

「僕の話、疑わないんですか……？ミニカーですよ、ミニヨンクですよ……。信じてくれて方が無理な話なのに……。」

僕は、そう言っつて顔を伏せ、老人の言葉を待った……。老人は一度溜息をつき、僕の方に顔を向けた。

「……ゴキブリの命でさえ、大事に思う兄ちゃんが、そんな疲れた顔でいたら……、信じるしかねーだろ……。」

そう言っつて、老人は僕の肩に手を置く。その手がどうにも暖かく……、心地良く……。そして……。優しく……。また、目尻が熱くなってくる。僕は、それを必死にこらえる。

(男が……。泣くなんて、みつともない……。)

「こんな物、受け取る必要なんて、ないさ……。」

「え……？」

予想外の言葉に、顔を上げる。

「俺が、処分しといてやるよ……。」
「で、でも……。」

つい、数分前までは、それが僕の望んでいた言葉だった……。でも、こんな、優しい人に……。迷惑を、かけるなんて、事……。

「大丈夫だつて！任せときな！」

「でも……。迷惑に、なるんじゃない……。」
「構わないさ。友達の、悩みもほおっておけないし……。」

そう言つて、僕の肩から手を離す。“友達”という言葉を楽しく感じつつも……。多少……。多少息苦しさを、覚える……。友達に、迷惑をかけている自分が、どうにも、情けなく、感じる……。

「あの……。」

自然と、声に出る……。

「な、何とか、迷惑を、軽減、できませんか……？」

帰ろうと、背中を向けていた友達が、振り返り、そして、優しく微笑む。

「別に良いよ。こっちが好きでやってんだし……。」

「で、でも……！」

老人は、大きく息を吐きだした。

「兄ちゃん、あんた、やっぱり優しいよ……。」

「え．．．？」

「じゃあ、判だけ押ししてくれ、この紙だけ見せれば届けた事になるから。」

「あ、はい．．．。」

友達の呟いた言葉の意味を、考える暇もなく、紙を手渡された。僕は、それに言われるがまま、判を押す。友達は、手を振り、段ボール箱を持ったまま帰っていった．．．。結局、お礼の言葉の一つも述べられなかったからだ．．．。

（何か．．．、言葉が出なかったんだよな．．．。）

それが、嬉しかったからなのかは分からない。でも、ただ一つ言える事は、友達のおかげで、気分が大分良くなった。心強い、味方が出来た事で、自分も前向きになる決心をする。

（お礼は、明日にすればいい。それと、名前も聞いとかなきゃな。）

僕は、残りのパンを口に押し込んだ。

10・6日目(後書き)

この後どうなるかは、また明日

11・七日目(前書き)

昨日は更新できなくてすいません

11・七回目

僕はまた、あの空間に立っていた。また音が聞こえる……。昨日よりもはっきりと……。しっかり……。その音が……。

ジーツ

何だろう？何の音だろうか……。僕はもつと耳を澄ましてみる。しかし……、

ピピピ

また、目覚ましの音に阻害される。僕は、目覚ましを止め、上体を起こし、両手を思いっきり上に伸ばす。

「んっ、ん~~~~。」

今日は、いつもより涼しく、それに気分も楽なので、快適な目覚めとなった。とはいえ、喉はとても乾いていて、すぐに台所に行って、喉の渇きを潤す。

「え……。？」

気分が良かったので、最近読まなかった新聞を、ドアの前から取ったのだが、その一面を見て愕然とした……。

「“ミニカーにまみれた変死体”って……。」

新聞にはモノクロの写真が、載っていた。

(これ、あのお爺さん!)

汗が一粒、頬に流れた……。

「T県Y市の、あるアパートで変死体が発見された。被害者は篠瀬春哉(62)。宅配業を営んでいて、明るく、近所の人達とも仲が良かったという彼が、ミニカーとミニヨンクまみれという、異様な状態で死んでいた。」

第一発見者は、アパートの管理人。いつも挨拶にくる篠瀬さんが、その日に限って来なかったので、心配になって部屋を覗いた、この事。部屋に、空の段ボール箱があった事から、ミニカーとミニヨンクはこの中に入っていたと思われる。しかし、その段ボール箱には差出人の名前が無く、警察では、死因を調べるとともに、犯人の行方を……。」

そこまで読んで、僕は大きな恐怖にかられていた……。段ボール箱に入っていたのは、間違いなくミニカーとミニヨンクだろう。しかし、そんな事より……、

(死んだ……?あの、老人が……?)

僕は、テーブル上のミニヨンクを見る。それらが、とても……、恐ろしいものに見える……。今すぐにも、とびかかってきそうな……。

(う……、駄目だ!駄目だ!)

僕は頭を、激しく左右に振る。

(昨日、前向きになるって決めたばかりじゃないか！篠瀬さんだつて、僕の為に……)

僕の頭に、一つ、認めたくない、事実が浮かび上がった……。

(まさか……、僕のせいなのか……？篠瀬さんが、死んだのは……)

あの、段ボール箱を、実質的に渡してしまったのは、僕だ……。

(僕のせいなのか……？僕の……)

自分の肩に手をのせると……、温もりを感じられた……。錯覚なのかもしれない……。けど、優しく、心地の良い、温もりが……。そこには、あった。

(……。篠瀬さん……)

いつの間にか、僕の目からは、涙がこぼれていた……。それが、友達を失った悲しみからくるものなのか、自分のせいだという後悔からくるものなのか……。これから、自分は、一人で立ち向かわなければならぬ事からの……。恐怖からくるものなのか……。分からなかった……。

泣き終えた後、僕は、いつものようにパンにイチゴジャムを塗って、口に運ぶが、食が進まない……。しかし、何かをしていないと、この恐怖に、耐えられそうになかった……。

「く、くそ……。」

そう呟くと、不意に目の前に何かが横切った……。黒く……。小さな物体……。それが、机の端で一旦止まる……。僕は、その瞬間、それが何であるかが分かった。

(ミニ、ミニ、ヨンク……。！)

「うわあああああああ！」

分かったら最後、僕は悲鳴をあげ、机を持ち上げる。ミニヨンクが元々置かれていた数個と一緒に落ちる。そして、机の面を下に向けて、思いっきり、ミニヨンクめがけて落とす。

ガシャツ、ドスツ

ミニヨンクがつぶれる音と、机が落ちる音がした。僕は、荒い息を整える。

「はぁ……。はぁ……。」

脳がしびれているかのように、少しの間、何も考えられなかったが、息が整うに従い、落ち着きが戻ってくる。

「ふう……。」

手の甲で額の汗を拭い、机を持ち上げる。下からは、見るも無残なミニヨンクの残骸があった。

「一体、どこから……？」

数個のミニヨンクの中から、さっきの黒いミニヨンクを探す。しかし、探せど探せど、黒いミニヨンクは残骸の中に無かった。

「おかしいな……。ん？」

視界の端に、ミニヨンクとは違う、黒い残骸があった。認識するのに少し時間がかかったが、ゴキブリの死体であるとはっきりと分かった……。

「まさか……。」

(また、見間違えた、のか……?)

そうとしか思えなかった。

「お、お前がいけないんだぞ！そんな、ミニカーみたいな体をしてるからだ！僕は、悪くないからな！」

誰に言い訳してるのか……、自分でも分からなかった……。

ピンポン

ドクン。心臓が、胸を破りそうなほど、大きく跳ねる。

(今、扉の向こうにいるのは、あの篠瀬さんでは無いんだよな。)

恐怖と、実は、あの老人がまだ生きているのではないかという期待を胸に、ドアに近づく……。

(そうだ、きっと、あの記事は何かの間違いなんだ。)

そう思うと、途端に気分は軽くなる。そして、ドアを開いた。

「おはよう御座います！判子をお願いします。」

立っていたのは、青い服で、眼鏡をかけ、茶色い段ボール箱を両手に抱えた、若い男、だった……。

(そう、だよな……、そんな訳、ない、よな……。)

やはり、あの記事は本物だったらしく……、篠瀬さんは、本当に、死んだらしい……。そう考えると、目尻が、また熱くなってくる。

「あの……、お兄さん？」

「あ、はい。えーっと、」

その瞬間、頭の中に、あの記事の内容が蘇る。

(駄目だ！受けついたら、僕もあの人の二の舞に……。)

「あの、迷惑かもしれませんが……、」

そう、言おうとした矢先、また、考えなおす……。

(で、でも……、ここで、断ったら、この人が代わりに……。)
そう考えたら、僕の言う事は、一つしかなかった……。

「何でしょうか？」

「いえ、判子ですね。分かりました。」

判子と朱肉を取ってきて、紙に判を押す。段ボール箱を受け取り、そして、男は車で帰っていった。

僕は、ミニヨソクの残骸とゴキブリの死体を、ゴミ袋に入れた後、机の上に段ボール箱を乗せ、ガムテープを剥がし、中を覗き込んだ……。

(~~~~~!)

中の、衝撃吸収材の量が前より明らかに少なくなっていた……。
つまり、中にある、ミニカーとミニヨソクの量が多くなっている……。

「何なんだよ……。」

11・七日目(後書き)

今日は二つ上げます

12・八日目(前書き)

なんか、読みにくいかもですけど、お付き合いください

12・八日目

また、僕は、同じ空間にいた……。フワフワ浮いていて、さらに、昨日と同じ音も聞こえる。

ジーッ

何だ？この音は？真つ暗な中で、必死に目を凝らして見る。そして、輪郭が、徐々に浮かび上がってくる……。

丸みを帯びた輪郭、そう大きくはなく、奥行きのある長い格好をし、真ん中の太い部分から、下方向に四つの円柱状の物……。そして、小さな突起物が左右から一つずつ出ている……。それは、どんどん、どんどん、僕の方に近づいてきて……。一瞬、何処からか、落雷のような……。光がさし、その姿が、明るみになる……。赤色のボディに、ナンバープレートを付けた……。思っていたものよりも小さい、ミニオンク、であった……。

ピピピ

僕は飛び起きた。しばらくの間、目覚ましも止めずに、上半身だけ起こして、両腕で抱えるようにして、体の、震えを沈めた……。

(ま、まさか……。夢、にまで……。)

体は、全身、汗でビッシヨリ濡れていた……。今日は、湿気が強く、暑さも尋常では無い。しかし、それだけで、かいた汗……。というわけでは、無かった……。

体の、震えを沈ました後、僕は、とにかく、怖くて……。怖

くて……。恐ろしくて、しばらくの間、動けなかった。

とにかく、何かをしようと、朝御飯の準備をし、いつも通り、パンに、イチゴジャムを塗り、口に運ぼうとする……。が、口に運ぶ際、イチゴジャムの赤色の光沢を見て、夢を、思い出してしまい……。震えが再発し、うまく……。口に運べない……。

「がっ……。あっ……。」

口の端に当たっては、戻し、また当たって、戻す。

「うっ……。あっ……!」

五本指で支えていた、パンが、ジャムの面を下にして……。テールの……。上の……。ミニヨンクに、落ちた……。また、ミニヨンクが視界に入った事で、震えが、最高潮に達する……。

「あっ……。ああっ……。うっ……。がっ……。」

口から、意味をなさない、言葉が、次々と漏れる……。パンを取ろうと、手をのばしては、震えが強くなり、そこで止めざる終えない……。

「な、何で……。こんな、目に……。」

震える両手を見ながら……。答えの出ない……。質問を漏らした……。

ピンポーン

ドツクン!

「ヒツ……、……ヒイ!」

尻餅をついて、両手で、後ずさりする。口から、小さな悲鳴が漏れ続ける……。

(だ、誰が、出るかつ!)

そう言って、部屋の隅に体を丸め、両手で頭を抱え込む。

ピンポーン

(早く、早く帰れよ! 帰れたら!)

「? 橋さん、いないんですか?」

外から、自分を呼ぶ声がする……。その時、僕の頭に過ぎつたのは、昨日の新聞……。

(あれは、僕のせいじゃない! 僕のせいじゃない! あれは、何かの

偶然だ！間違いだ！僕が悪いんじゃない！)

自分に言い聞かせても、責任感からは、逃げきれない……。

「……くそ。」

そう、小さく呟いて……、立ち上がり、判子と朱肉を持って外に出る。

「あ、おはよう御座います、判子をお願いします。」

すぐさま、僕は判を押し、それを受け取って、踵を返した。両手に重くのしかかる段ボール箱を、苦々しげに見ながら、テーブルの上が、いつぱいいつぱいなので、地面に置いた……。そして、恐る恐る、ガムテープを剥がし、中を覗く……。

「また……か……。」

衝撃吸収材がもう、一枚も、入っていない……。中には、所狭しと、ミニカーとミニヨソクク山……。それを見ただけで、また、体の震えが……。

結局、何も食べないまま、十時になる。ゴミ袋の中に、全てのミニカーとミニヨソクク、それからパンを、何とか詰め込んだ。終わる頃には、体は汗まみれになっていた。

「買い物、行かなきゃ、いけないん、だよな……。」

食材は、もう尽きている。僕は、帽子をかぶり、マイバックを持って、外に出る。と、そこで、ふと空を見ると、一面びっしりの雲で、今にも雨が降り出しそうだったので、傘も持っていく……。

外はジトジトと湿って、おまけに暑かったが、一人きりの薄暗い部屋よりかは、マシであった。しばらく歩くと、あの長い上り坂に着く。僕は、一度大きく息を吐き、意を決して、一步一步を踏みしめていく。

半分ほど登ったところで、脚が重くなつていく。傘を杖代わりにながら、頂上を目指した……。この湿気と暑さ、そして、この上り坂は一種の拷問のようでもあった。頂上に着く頃には、脚は、まるで鉛のシューズを履いたように重かった……。僕は先日のように、一旦公園に行き、喉を潤し、ベンチに座った。

先日、うるさいくらいに鳴いていた蝉は、湿気のせいか、数えるぐらしか鳴いていない……。足元をふと見ると、何体かの蝉の死体があつた……。蝉は、一週間、ないし二週間しか生きられないと言われているが、実際には一カ月は生きるらしい。蝉自体を飼育するのが難しく、早く死ぬ事から、そのような、俗説が流れているのだ。

(人間に捕まえられた方が、早く、死ぬ、か……。)

それは、あまりにも、今の僕の状態と酷似していた……。

(最終的には……。死ぬ、のかな……。?)

ハッとなった。

(い、いかん。弱気になつてどうする！死んで……。死んで、たまるかよ！)

頭を思いつきり振って、馬鹿な考えを振り払う。しかし、一度頭に出た、考えというのは、なかなか消えないもので……。僕は、しばらくの間、蝉の死体を見つめていた……。

しばらくすると、蝉の死体に向かって、黒い物体が、迫ってきた。蟻だ。蟻が列をなして、蝉の死体に向かってきて、そして・・・、分解を始めた・・・。

(餌になっちまうのか・・・)

まるで、“蟻と蝉”の逆ではないか。まあ、日本では“蟻とキリギリス”のほうで、伝わってはいるが・・・。内容は同じで、夏の間遊び呆けていた蝉、ないしキリギリスは、冬になると食べ物が無くなり、そして夏の間、働いていた蟻が生き残るといふ・・・。それがどうだろう？蝉は、生きている間も、樹液という井戸を掘っては、蟻に追い出され、死んでからも蟻の餌になる・・・。

(残酷、だな・・・)

分解する様を、僕はまじまじと見つめていた・・・。やがて、蝉の全身に小さな蟻が集った状態になる。そして、僕の頭に、一つ、疑問が過ぎた・・・。考えてはいけない、疑問が・・・。

(所謂言えば、篠瀬さんは・・・)

気付いた時は、もう遅かった・・・。次の疑問は、止めようとしても、頭に出てきた。

(ミニカー、まみれ・・・、で・・・)

頭の中に、見てもいないのに・・・、映像が、流れた・・・。暗闇の中、部屋に倒れている・・・、篠瀬さん・・・。表情は苦痛に歪んでいる。その体を、覆い尽くす、無数のミニカー、と、ミニヨソク・・・。

「ヒッ．．．！」

すると、目の前の、蝉の死体と、蟻が、それらに．．．、重なって．．．、

「うわああああああ！」

全身、汗でびしょ濡れになっていた．．．。気がつくと、僕の下には、粉々になつた蝉の死体と、無数の．．．、蟻の死体があるだけだった．．．。公園にいた、何人かが僕を見つめていた．．．。僕は、そこから水も飲まず、逃げるように出ていった．．．。自動ドアが開き、クーラーのかかったデパートに入る。ビッシヨリと、汗に濡れた体には、その空気は、冷たかった．．．。

マイバックを片手に、僕は買い物を進める．．．。カップ麺を何個か入れ、肉売り場に向かった．．．。僕は、何もばやく元気がなかった。お腹がすいて、喉がカラカラだった．．．。目の前の色取り取りの食べ物を見る度、つい、魔がさしそうになるのを懸命に堪え、豚肉を探す。

フワッ。いい匂いが漂ってくる．．．。それに誘われるまま．．．、匂いのする方向に向かった。すると．．．、目の前に、良い匂いのする肉。僕は何も考えず、ついている爪楊枝を掴み、口に運んだ。体中の、疲れが、一気に吹き飛ぶような感覚がした．．．。僕は、その感覚を噛み締めた。そして、その場を離れようとする．．．。しかし、誰かに、肩を．．．、掴まれた．．．。

「お兄ちゃん、どう？美味しいでしょう？」

笑顔の、おばさんが僕の顔を覗き込む。しまった、と思う頃には、もう遅く、右肩を、がっしりと掴まれていた．．．。

「お兄ちゃん、この牛、とっても美味しいんだよ？どう？」

「別に……、いりません……。」

「どうして？もったいないわよ。こんな美味しいの、他にはないわよ。ちよつと値段は張るけど、ドーンと。ね？たまには、自分にご褒美でもあげたら？」

「だから、いりません。」

早くその場を離れたかった……。少しずつ、腹のムカつきが強くなっていく。しかし、それでもおばさんは、説得を、やめようとはしなかった……。

「そんな事言わずに……。ホラ、このタレ。すっごく美味しいし、セットで買えば三百円お得よ。」

「だ、だから……。」

「あ、もしかして、焼くの上手じゃない？なら、こつやって……。」

「だから、いらないうって言うてんだろ！」

僕は思わず怒鳴ってしまい、周りの視線が、一気に、僕に集中した……。おばさんは、凍りついたように、動かない……。僕は、少しして、状況に気がついた……。

「あ……、す、すいません……。買わせて頂きます……。」

僕は、その場にあつた、牛肉とタレをマイバックに入れ、後ろを振り返らず、逃げるように、その場を去った……。後ろからの視線が……。痛かった……。

会計を済ませて、外に出ると、雨が降っていた……。それも、土砂降りである。僕は、持っていた傘を開き、雨の中を歩きだした……。

。。こちらからも、途中までは上り坂となるのでつらく、喉も乾いていたので、頂上に到達すると、僕は一旦公園に向かった。その間、僕はずっと、さっきの事を考えていた。。。

(僕。。。、どうしちまったんだろう。。。怒鳴りつけたり。。。公園で叫んだり。。。)

僕は、水を飲んでいる間もずっと、その事が、頭から離れなかった。。。

「ねえ？どうしよう。。。？」

「やむまで待つしかないだろ。。。。」

「何時やむの？」

「知るか、んなの。」

声のする方向を見ると、公園の中心にある大きな木の下で、男の子一人、女の子一人が雨宿りをしていた。自然と、そちらに足が向いた。。。

「傘、貸そうか？」

自分でも、馬鹿な提案である。僕はこれ以外の傘を持っていない。つまり、今渡したら、自分は必然的にびしょ濡れになってしまう。。。子供達はお互いに顔を見合わせた後、僕の方を見る。

「でも、それだとお兄さんが。。。」

「大丈夫、この中にまだ一本あるから。。。」

サラッと僕は嘘をつく。とにかく、持って行ってほしかった。。。何か、償いをしたかった。。。

「なら、有難う御座います……。あの……。何時、返せば……？」

「えーっと、来週の日曜日でもいいよ。ここの公園で……。」

「分かりました。おい、智代、行こうぜ。」

「待つてよ！」

僕から傘を受け取ると、二人は雨の中に消えていった……。そして、僕の体にポツポツと雨が当たる……。

僕は、後悔とも安堵とも取れぬ溜息を吐くと、食材が濡れないように、マイバツクを抱える。ふと、下を見ると、小さな人形が落ちていた……。茶色く長い髪をした、女の子の人形。

(さっきの子達の、かな……。?)

僕はそれを拾い、マイバツクに入れた。今度会う時に返そうと、心に決める。只、償いをしたい一心で……。

歩き出す……。昼間のベンチが、見えた……。僕は、吸い寄せられるように、そこに行き、下を向いた……。あるのは、僕に踏みつぶされ、粉々になり、雨に打たれている蝉の死体だけだった……。

僕は、それを同じく雨に打たれながら、暫しの間見つめていた……。

家に帰った僕は、すぐに服を着替え、“ホース”で体を洗う。人形を机の上に置き、軽く昼食をとり、その後、僕は、食材を見て、溜め息を吐くしかなかった……。

「肉、買ったまま……。フライパンで焼くか……。」

牛肉を食べるほどの元気はなかったが、買ったのに食べないのはも

つたいなかった……。僕は、夕食までの時間、この恐怖を乗り切るにはどうすればいいか……。じっくりと考え込んだ……。が、何も思いつかない。

(せめて、篠瀬さんが、いれば……。)

そう思った瞬間、僕の足は、玄関の方へと向かい、新聞をとり、その場で開く。

一面には、くだらないタレント同士の恋愛発覚が載っていた。僕はそれを無視して、二面を見る。すると、探していた記事を見つける。

“ミニカーまみれの死体”

僕は、目を閉じ、大きく息を吸いこんで、吐いて、心の準備をする。

「一昨日、T県Y市で発見された篠瀬さんの死因は心因性ショック死と断定。警察は、昨日の方針を一転。事故として調査を進める様子。」

(心因性……。ショック死……。?)

いったい何が……。篠瀬さんに何があったのだろう……。それを、思いつく筈もなく、僕はむしろ、それを考えないようにした……。真実を知ってしまったのは……。自分が……。自分で、いられなくなりそうで……。僕は、記事をさらに読み進める。

「不可解な事に、警察がミニカーとミニヨンクを現場から発見された段ボール箱に詰めたとこ、全ての量が入らない事が判明。」

(……。え?)

入りきらない・・・？それじゃあ、残りのミニカーやミニヨソクは・・・？

(何処、から・・・？)

体全身が、朝と同じ、震えに襲われた・・・。

(何処から・・・？何処から？何処から・・・！何処から！)

夜、僕はフライパンで肉を焼き、豪勢な御飯を用意した。しかし・・・、食欲が無かった・・・。ナイフとフォークを握り、肉を切り、口に運ぶが、どうしても口に入る前に体が拒絶する。

「くそっ・・・！」

ピンポン

ドックン。

(えっ・・・？)

「だ、誰だ・・・？」

もう、今日は……、来た、筈、だよな……。僕は、恐る恐るドアを開ける。

「こんばんは。」

なんと、ドアの向こうにいたのは、髪が長くて、薄化粧の美しい女性だった……。

「隣に引越してきた川内です。以降よろしくお願いします。」

「あ、はい。」

深くお辞儀した女性を見て、僕はこの女性とは仲良くしたいと思った。さつきまでの暗い機嫌も何処かへ行ったみたいで、この女性には本当に救われた。

「あ、これ、よろしければどうぞ。」

そういつて、両手に持っている袋を、僕の目の前に持ち上げる。その袋の中には、大量の……、ミニカー……、が……。そして、川内さんは、満面の、笑み……で……。

「……!」

僕は、それを思わず手で振り払った。川内さんは小さな叫び声をあげ、地面に袋が落ちる。

「あ、クッキーが。」

(え……?クッキー……?)

僕は地面に落ちた袋を見る……。それには、砕けたクッキーが入っていた……。

(あ、れ……。さっきは……。確かに……。)

ミニカーが、入っていた、筈、なのに……。

「ご、御免なさい。お気に召しませんでしたか。」

そう言つて、川内さんは逃げるように帰っていく……。僕は、その後ろ姿に手を伸ばしたが、届かず、声も出なかった……。地面に残されたクッキーを拾い、部屋に戻る……。

(僕、どうなつちまうんだよ……?)

「クソツ！」

僕は、砕けたクッキーを鷲掴みにし、口に押し込んだ。

「クソツ、クソツ！クソツ……！」

まだ、飲みこんでないのに、次々と口に入れていく。全て無くなるまで、僕は口に運び続けた……。全てを食べ終えた後……。僕は急激な吐き気に襲われた。生唾が口いっぱいに広がる。僕はなんとか我慢しようとするが、体は勝手にトイレに向かっていた。

「オエツ……。」

さっき口に入れた、クッキーを全て吐き出した……。元々食欲が無い所に、無理矢理詰め込んだのが原因だろう。しかし、食べない

と・・・、申し訳が、立たなくて・・・。

「クソッ・・・。」

12・八日目（後書き）

主人公・・・、壊れてきました

13・九日目(前書き)

残るは後・・・

13・九日目

僕はまた、同じ空間にいる……。暗闇で、掴まるところが無く
て、只するのは、一つの音。

ジーツ

そして、一つの影。車の形をしているが……。それよりもっと
小さい、ミニヨンクが……。

あれ、もう一つ来た……。また一つ……。

……。真つ暗な空間の中に、ミニカーが、大量にやってきた。

僕は、逃げようと後ろを向き走りだそうとするも、地面をうまく蹴
れない。そうこうしている間に、全部が動き出し、僕の所に来る……
。そして、体中がミニカーとミニヨンクまみれになって……。
暗闇の部屋の中で倒れていて、傍らには……。段ボールの空、箱
……。が……。

「うわーっ！」

僕は飛び起きた。心臓が張り裂けそうなほど、バクバクいつてい
る……。右手を心臓に当て、時計を見ると、まだ、五時だった……
。体は汗まみれになっているが、暫くの間、両手で体を押さえ……
、動く事が、出来なかった……。

役目を終えていない目覚ましを解除し、水を飲み、用を足した後、
汗臭く、蒸し暑い布団の中で、ガタガタと震える……。

(夢の続きは……。きつと……。篠瀬さん、みたいに……
！)

「ヒッ……！」

頭まで、布団をかぶり、体を……、震わせる……。

目覚ましが一秒、一秒……、時を刻んでいく……。そのコチコチという音だけ、部屋に響く……。それは、かえって僕の恐怖を、増幅させていた……。

もう、何時間もその状態でいた時……、恐れていた事が起きた……。

ピンポーン

ドックン！

（出ない！出ない！もう、自分のせいで、誰がどうなるかと知った事か！）

ピンポーン、ピンポーン

暫くして……。音が鳴り止む……。僕は安堵の溜息を、震えながら、吐いた……。

少しして、僕は、袋の中を見ないように……、ゴミ袋を持つ……。

(これを捨てて……、後は貰わないようにしたら、もう、ミニカーやミニヨンクを見る事もない……。)

僕は、震える体を押さえながら、立ち上がり、ドアに向かった……。そして、木製のドアを、押した……。外から光が差し込んでくる。そして、外に出ようとして、足を踏み出した瞬間……、

(ん……?)

足に違和感を覚え、下を向く……。

「アツ……、ア、アアツ……。」

ドアの……、隙間から……、列をなして……、ミニ、ヨンクが……、部屋に次々と……、次、々と……！

僕の頭の中に、今までの事が過ぎる……。

(なんで……、鍵も……、きちんと掛けたのに……。何でなんだよ……。)

(ミニカーとミニヨンクまみれという、異様な状態で死んでいた。

) (ミニカーとミニヨンクを現場から発見された段ボール箱に詰めるところ、全ての量が入らない事が判明。)

ジーッ

ミニオンクは容赦なく……、こちらに向かってくる……。後
ずさりしていた僕の……。背中にも、壁がついてしまう……。

(だ、誰か……。助け……。)

すると、僕の手にも、あるものが当たった……。

チャッカマン……。僕は、それをすぐさま手に取り、火をつけ
ようと、ノック式のボタンを押す。

カチッ

空しい音が、鳴り響くだけだった……。

(オ、オイル……。切れ……。?こんな……。時に!)

僕は何度も、何度もボタンを押す!

「点け!点け!点け!」

その願いも空しく、いつかこうに火は灯らない。

「点け!点きやがれ!」

ミニオンクは、もう、すぐそばまで……。来ていた……。

「点け!頼む!点いてくれ!」

ボツ！

(点、点いた……。)

先っぽに火の灯った、チャツカマンを握りしめ、僕は、ミニヨンクにチャツカマンを向ける！

「も、燃え、ちまえ……！」

そうして、ミニヨンクに、もう少しで、チャツカマンが届く、その時……。

「何してんですか！」

そう言う声が聞こえた。その声の人物に、両腕を掴まれ、体を起こされ、チャツカマンを使えなくなる。

「離せ！早くしないと、死んじゃうんだよ！離してくれ！」

「何してんですか！」

「ミニカーが、ミニヨンクが！アアツ……！」

早くしないと殺される！何か得体のしれないものに殺されてしま
う！

バチン！

不意に、頬を叩かれた……。

「こんなところで、火をつけたら火事になるでしょう！」

叩かれた痛みにも、ようやく我にかえる……。目の前にいたのは……、大家さんであった……。そして、今、僕は、自分のやるうとしていた事に気がつき……。一気に罪悪感にかられる……。

「ば……。僕は……。なんて、事、を……。」

そのまま、僕は膝をついた……。大家さんは、何が何だか分からないと言った様子で……。最後に「今度やつたら、出ていってもらうからね！」とだけ、言い残して去っていった。

僕は、その場で、暫く、立ち尽くしていた……。自分のやるうとしていた事の恐ろしさと……。自分が自分で無くなっている事への恐怖が……。体を駆け巡った……。

僕は、部屋の片づけをした。ミニオンクや、投げた時に壊れた、物の残骸を次々と袋に入れる。しかし、もう、ゴミ収集車は行ってしまった時刻である……。また、後、三日待たなければ捨てる事は出来ない……。ゴミを集めていると、一つの物が目に入った……。

それは、昨日拾った、人形……。しかし、投げた衝撃で……。片脚が取れている……。

「あつ……。あつ……。」

僕はそれを手に取り、取れた片脚のパーツを、着く筈もないのに……。元の部分に当てる……。

「ごめん……。ごめん、よ……。」

僕は、人形を握りしめた……。

「何で……、何で、こんな事になっちまったんだよ！何でなんだよ！」

片づけを終えた、僕は自問自答をした……。

「あの保険会社にさえ、出会わなければ……。」

しかし、もう、あの保険会社のせいではないんじゃないか、というのは、頭の中に浮かんできている……。

(もっと別の、何かが……、何かが……。)

そう考えただけで、体は立てないほどに震えだす……。

「くそっ！」

僕は、投げられてはいたものの、まだ壊れて無い携帯電話に、番号をプッシュした。何回かコールの後、低い男の声が聞こえてくる……。

「はい、こちら笹原保険会社の……。」

「ふざけんなよ！てめえら！この前、忠告したのに無視しやがって！」

「あ、あの……、高橋さんですか……？」

僕はそれを無視する。

「警察に言っつてやるからな！貴様ら、破滅させてやる！」

「あ、あの……。」

僕は、反論される前に電話を切った。というより、反論される事が怖かった……。もし、反論されると……。今まで起こった全ての事に対する恐怖に……。押しつぶされる様な気がした……。

13・九日目（後書き）

ところで間違えて同じの二つ投稿した場合って、片方消すのってどうやるんでしょうか？

明日で最終回まで上げます

14・十日目(前書き)

ミニカーはどこまでも

「何故ですか！」

交番に、僕の声が響き渡った……。僕は、朝起きると、朝御飯も食わず、宅配便の人が来る前に、家を出て、交番に向かった。手には、証拠となるミニカーやミニヨソクノ残骸が入った袋を持って……。そし

て、三人の刑事に、今まで起こった事を全て話した……。しかし……、

「でもねー、これだけじゃ、その人達がやったっていう証拠には……。」

初老の男は、袋を指さして言った。

「それに、受け取ったのはあなたの意思でしょ……。」

眼鏡をかけた男性が続く。

「それに、そんな話、信じられないね……。」

少し太った若い男性が、そう言った。

「本当なんですよ！それに、受け取ったのは確かに……。、そうですが……。、それだけじゃないんです。八日前は鍵を開けたところに侵入して、ミニカーとかを置いて、五日前と昨日は、ドアの間から入ってきたんですよ！」

僕は必死に弁明する。が……、刑事達は笑いだした……。

「そんな事、ある訳無いでしょう。」

「警察、なめないで下さいよ。」

「本当なんです！信じてください！」

信じてすらもらえない……。

(何なんだ……、こいつら……。篠瀬さんは、すぐに信じてくれたのに……。)

「まあ、本当だとしても、たかがミニカーですし……。」

「ミニ、ニカー……?」

その言葉を聞いた瞬間、僕のどこかで、スイッチが入った気がした……。周りの騒音、声がどんどん……。どンドン、どンドン大きくなっていく……。頭痛がして、耳鳴りがして、目の前がグニャグニャと曲がっていく……。分からない、前がどちらなのか……。上は何処なのか……。?そんな、僕の様子にも気付かず、刑事達は雑談を始めた。

「いや、私も昔、子供にミニヨンクを買ったら、偉く喜びましたー……。。」

「ミニ、ヨン、ク……。?」

頭の中で大きくなって聞き取りづらい声の中で、その語だけが頭に入ってくる……。意識の中にミニカーとミニヨンクの姿がはつきり映る……。

「アツ・・・、アツ・・・。」
「どうしました・・・？」

僕の肩に何か当たった……。グニャグニャに曲がった視線の中、目を凝らしてそれを見る……。

ミニカーとミニヨンクだった……。それが大量に集まり一つの棒のような形になっていた……。

「うわあああああああああああああ！」

そのミニカーを手で払う！その時、後ろを振り返ると……。大量のミニカーが……。ミニヨンクが……。

「うわあああああああああああああ！」

僕は、ミニカーに跳びかかった。そして、両手でミニカーどもを殴りつける。

「壊れる！壊れる！壊れちまえ！壊れるー！」

途端に両腕が動かなくなった……。僕は両腕を見る……。大量の、ミニカーが……。まとわりついていた……。

「うわああ！わああ！」

無理やりに両腕を動かし振り払い、同じように、殴りつけ、ミニカーを壊そうと試みる。

「崩れる！壊れる！消えてなくなれ！」

しかし、ミニカーは崩れもせず、グニヤツと形を変えたりするだけで、壊れもしない。僕の拳もいい加減痛くなってきたが、そんなことは気にしてられない、手の皮膚がやぶれている気もする。しかし、それでも僕は手を止めない。ただ恐ろしかった、怖かった。・・。

「何でだ！くそっ！壊れやがれ！壊れろ！壊れろー！」

僕の体に、生暖かいものがはねかえってきた・・。

14・十日目(後書き)

うまく書けなかったorz

15・何者も、どんな人でも・・・(前書き)

最終回です・・・、長かった

15・何者も、どんな人でも・・・

「被告は、警察署の刑務官三人に暴行を加えました。よって、懲役三年、執行猶予五年を言い渡します・・・。」

判決が下った・・・。

「執行猶予なんて・・・、いいです・・・。早く、刑務所に入れてください・・・。」

僕は、衆人の前でそう言った・・・。あの日から、数ヶ月後の事だった・・・。

ガシャン

鉄格子の扉が閉まり、鍵がかけられる・・・。僕は刑務所にいる・・・。それも、牢屋の中に・・・。

この牢屋は、鉄格子に格子窓という、古いつくりであった。薄汚れた天井と床、カビ臭い壁。中にあるのは、布団ぐらいのものであったが・・・。外よりは大分居心地が良かった・・・。もう、ここにいれば、ミニカーもミニヨンクも見ずに済む・・・。僕は、牢屋に入れられた事を、不幸とは思わなかった・・・。

精神を取り戻したのも、最近の事だ。少し前までは、目に入る全てのものがミニカーないしミニヨンクに見えていた・・・。しかし、ようやく、幻覚を見る事もなくなった・・・、ここで三年も過ごせば、きつともうミニカーと関わる事もないだろう・・・。

(とうとう、逃げきったんだ！)

僕は、勝利の優越感に浸った……。

ジーッ

耳に、音が、届いた……。

(えっ……?)

僕は音のした、格子窓の方を見た……。

(お、おい……。嘘、だよな……。?)

僕は耳を澄ましてみる……。

ジーツ

いよいよ本物だと分かった瞬間、僕は何も考えられなくなった……。鉄格子に飛びつき、ドアを開けようとする。しかし、鍵が掛かっていて開かない！僕は、鉄格子を両手で持ってガシヤガシヤと揺らす。

「おい！出してくれ！お願いだ！」

しかし、誰も僕の事には気がつかない……。自分の脚で鉄格子を何度も蹴りつけた！脚の骨が折れるかもしれないという危険は全く抱かず、僕は一心不乱に鉄格子を蹴りつけるが、それも虚しく金属音が響くだけだった。

「誰か！頼む！助けて……。助けてくれえ！」

ジーツ

「ヒッ！」

気がつくのと、音はもうすぐそこまで来ていた……。僕は格子戸をゆっくり振り返り、そのまま動けなくなった……。少しして、格子窓の隙間から……。ミニヨンクが……。列をなして……。続々と……。入って、きて……。、

「う、うわあああああああああああああ！」

15・何者も、どんな人でも・・・（後書き）

夕　リふうの後書き

いかがだったでしょうか？これは、あなたの身近で起こっている事かもしれません……。最後に見たのは、果たして、？橋の見た幻影だったのか……。それとも、あの保険会社か……。それとも……、

という事で、今回は文章に凝った怪奇小説でしたが……。改めてみると、怖いですね（笑）。しかし、この怖さが伝わっているかは微妙……。まあ、奇妙だと思っただければ幸いです。

しかし、書いてる間にプロットは変わるわ、人が死んでしまうわで（苦笑）。こんな事になるつもりはなかったのですが……。まあ、怖くなったからよしとしましょう……。感想も送ってくれたら幸いです。

ちなみに次の番外編は、作者がこの小説を書くに至った経緯をgdgdと語る話で、全くストーリーには関係ないので、暇がない人は見なくてもいいです。

ピンポーン

ん？誰か来たようですね……。どうぞ。あ、判子ですね、分かりました。

段ボール箱が届きました。はて、身に覚えが無いのですが……。まあ、開けてみましょう。ん？

ミニカー・・・？

番外編・・・どうやってこの小説をおもいついたか（前書き）

というわけで番外編

番外編・・・どつやってこの小説をおもいついたか

高橋「こんにちは！皆さん」

篠瀬「よつす！皆の衆！」

高橋「篠瀬さん、あなた死んだでしょう・・・」

篠瀬「知るか、作者が一人に語らせるのもなんだからって配慮だ」

高橋「まあいいや。この小説は、作者が友達と馬鹿な話をしているときにできた話なんだ」

篠瀬「家に帰ってる途中で、即興で作った話を語るといふ何の意味があるんだなことをしていたらしいぜ。」

高橋「そこで、作者が友達にミニカーの話をしたんだ。最初はただのギャグだったんだけど」

篠瀬「そうそう！確か、保険会社がカーボン紙なりなんなり使って、兄ちゃんを絶対解約させないように仕組む話だった」

高橋「マネキンの中にミニカー詰まって渡してきたってシーンもあつたよ」

篠瀬「何故、マネキン？」

高橋「知りませんよ。まあそれで、グダグダ話している時にオチに困って、僕が警察署に行つて、唐突に精神崩壊するという意味不

明な事になったんだ」

篠瀬「んで、その後、作者がまた即興で追加して、牢獄の鉄格子からミニカーが入ってくるシーンを付け加えたらしい」

高橋「そこまで語り終えて友達が”その終わり方、世にきみよ、みたいじゃね？”と言ってきたのさ」

篠瀬「そして、作者もそれに同意して、この話をオチとミニカーだけ残して流れを自然にすべく大幅に変更して、この話が出来た」

高橋「途中で、篠瀬さんが死んだのは邪魔だったからの一言で作者は片づけたらしい」

篠瀬「ひでえ！」

高橋「それにしても作者ももったいないことしたよな……。これミニカーじゃなくて市松人形とかだったらもっと怖くなってましたよ」

篠瀬「だから、これはあくまで奇妙な話なの！ホラーじゃないの！」

高橋「まあいいか。ところで、次回は涼シリーズのギャグ短編の予定です」

篠瀬「おい、中編はどうした！」

高橋「未だにプロットが固まってなくて、書き始めてもいないらしい」

篠瀬「おいおい。あ、ちなみにタイトルは”お腹ウワァー”の予定」

高橋「・・・何それ・・・？」

篠瀬「さあ？あ、そろそろ時間だぜ、兄ちゃん」

高橋&篠瀬「それじゃあねー」

番外編・・・どうやってこの小説をおもいついたか（後書き）

という事で、次回も期待せずにご待たれてくれるとうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7310i/>

LOSING MY MIND 世にも奇妙なお話

2011年9月12日10時15分発行